

山梨県立大学地域研究交流センター
2013年度 観光講座

南アルプスの 自然と文化

山梨県立大学地域研究交流センター



ごあいさつ

山梨県立大学学長 伊 藤 洋

日本全国津々浦々には、「駒ヶ岳」と名のつく山はいくつあるかと、山男の友人に尋ねてみました。すると「24座」ほどあるという答えが返ってきました。甲斐駒ヶ岳は言うに及ばず、蝦夷駒ヶ岳、秋田駒ヶ岳、陸前栗駒山、会津駒ヶ岳、越後駒ヶ岳、赤城駒ヶ岳、木曾駒ヶ岳、上駒ヶ岳（白馬岳）、箱根駒ヶ岳などは素人の筆者もよく知っていました。ただし、富士山にも駒ヶ岳があることは教えられるまで知りませんでした。富士浅間岳の別名が「駒ヶ岳」なのだそうです。

なにゆえにこんなに沢山の「駒ヶ岳」が生まれたのでしょうか？ それは、これらの山々に春に残る残雪や晩秋に生ずる駒形が麓の農民にとって農事暦の役割とその年の豊凶を占う「シンボル」または「記号」であったためではなかったのでしょうか。駒形が生まれる山は奥山であって、そもそもそこは里の人々にとって信仰の対象だったでしょうが、そこに突如現れる駒形は神意のディスプレイそのものであったに相違ありません。

富士駒ヶ岳を除けば、甲斐駒ヶ岳は23座の駒ヶ岳群の中にあって最高の高さとその秀麗の美をもって尊崇されてきました。この甲斐駒を北限に南は光岳までの山また山の峻険な連峰を南アルプス連峰といい、この東西約15km、南北約50kmに及ぶ全域が、1964年に南アルプス国立公園として指定されています。

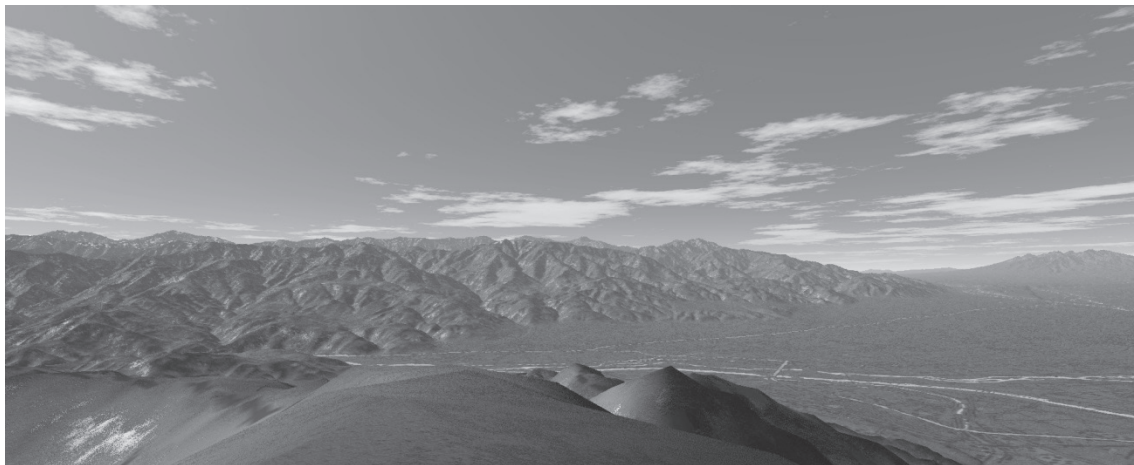
図は、筆者が幼少のころから折に触れて懐かしく眺めてきた南アルプス連峰の姿ですが、市川三郷町の大島山（標高1,117m）を基点として描画したデジタル編集画像です。この甲府盆地の西側を全面的に覆う高い壁は、日本海をわたって吹いてくる水分を大量に含んだ季節風の衝立となり、山壁を上ってくる間に雨や雪となって乾燥し、その乾いた風が甲府盆地に下りてくる。これが、わが国有数の少雨環境をつくりだし、それが果樹王国山梨を支えてきました。

同じ理由によって、西側からやってくる限りいかなる台風といえども山登りに勢力を使い果たし、寒さにエネルギーを奪われて猛威を振るうことはできません。1959年8月13日の台風7号のように南アルプスと天子山地の合間の富士川峡谷という隙間を利用しない限りそのエネルギーは役立たない。まことに甲斐の山々は天然の防壁なのです。

現代のように、気象予報が高い精度を確立する以前、この南アルプス連峰は甲府盆地に住む農民にとって天気予報の根拠を示す気象データのディスプレイでありました。スカイラインにかかる夕焼け、朝焼けは言うに及ばず雲の形や色、その流れる向きと速さ、それらは向こう一日の天気を占う基本データであり、筆者の父や祖父たちは自らの予測に従って農事暦をめくっていたものでありました。

南アルプス国立公園は入れ込み人口約60万人と、全国30の国立公園の中にあって最も

少なく、いまだに原始の姿をとどめている稀有な秘境です。主峰北岳をはじめ南アルプス連山はフィリピン海プレートエネルギーを受けて成長を続ける若い山々であって、それだけに「ダイナミック」な「環境問題」を惹起する今日的環境空間でもあります。



この南アルプス連峰を中核として UNESCO エコパーク指定がいま着々とすすめられています。今年6月にスウェーデンで開催されるユネスコ MAB 計画国際調整理事会において、登録の可否が決定される予定だとも聞いています。このタイミングをとらえて、山梨県立大学は、恒例の「2013 年度観光講座」を「南アルプスの自然と文化」に決定して、多種の専門分野からそれぞれの碩学を集めて全5回にわたる講座を開催致しました。本書はその記録です。

UNESCO エコパークは、生態系の保全と持続可能な利活用の調和（自然と人間社会の共生）を目的とし、そのために「核心地域」、「緩衝地域」及び「移行地域」（社会と経済の発展が図られる地域）の三つのゾーニングを設定することが求められています。本講座は、これらを一瞥する意味を持つものであり、指定後の活動のための学習の場の提供をも企図して構想されたものです。

本講座開設に当たり、主として係わった吉田均山梨県立大学地域研究交流センター長および同センター奥水達司特任教授、加えてご支援を賜った講師陣の皆さん、また毎回出席されて質問や自説を発表するなど実に熱心に参加された聴講生の皆さんに心から感謝申し上げます。

なお、最後に、本講座は山梨県からの支援によって行われたことを附記して深甚の謝意を表します。

講演会のいきさつ

山梨県立大学特任教授 輿水達司

山梨県立大学では地域研究交流センターが主体となり、平成25年度の観光講座「南アルプスの自然と文化」を企画・実施しました。その際の講演要旨を記録として、このたび報告書にまとめることができ、関係の皆様には心から御礼申し上げます。この講演会を企画した立場から、その背景と経緯を以下に簡単に述べてご挨拶とします。

山梨県には本邦最高峰の富士山があることは今さら説明の必要はありません。しかも、この富士山が平成25年6月には世界文化遺産に正式登録になりました。富士山に続く本邦における第二位の高峰も、実は山梨にあることは、意外に知られていません。それが南アルプスの北岳です。単に山の高さの点で地球上を広く見渡してみますと、富士山や南アルプスよりも高い山は世界にはいくらかでもあります。しかし、その姿・形状や自然科学における価値を始めとし、そこに備わる芸術・文化等の視点からすると、富士山同様に南アルプスも、他を圧倒して世界に誇るべき山であります。それ故に、実は南アルプスの世界自然遺産登録に向けた取り組みが、行政・研究者等によって組織的に開始され、既に数年が経過しているわけです。こうした取り組みがあることも、またその学術的背景も一般には十分に知られていないのではないのでしょうか。この事情によって、山梨県立大学地域交流センターとしては、昨年実施した「富士山世界遺産講演会」に続いて本年度の講演会のテーマを、観光資源としても価値のある南アルプスの自然と文化を取り上げた次第です。

南アルプスや富士山に限らず、本邦の山の持つ魅力が広く理解され注目度が上がる節目は、中世以降現在までには何度かありました。その中で、江戸時代の長い鎖国が解け明治政府になって、西欧文化の取り入れの盛んな時期もその一つであることは間違いありません。日本が近代化の遅れを一気に取り戻す目的で、西欧文明をひたすら取り入れようとした文明開化の頃に、多くの外国人技師や知識人を招いた時期です。この時の外国人によって、富士山をはじめ本邦の多くの山々が登られその魅力も理解されました。その過程で、飛騨山脈が「日本アルプス」と命名され、また登山家としても良く知られた宣教師ウエストンによって北岳などの一連の山については「日本南アルプス」と名付けられたわけです。しかも、それ以上に重要でかつ注目すべきこととして、彼ら外国人によって、近代登山だけでなく地形・地質学や動植物学などの近代科学も当時の日本に取り込まれ、日本の自然科学研究の前進が一気に図られたのも、この時期だったのです。

具体的に地形・地質学の分野においては、今から約130年前に、ドイツからの御用学者エドモンド・ナウマンは、調査旅行で八ヶ岳（具体的には平沢峠付近）を訪れた際に、北岳・甲斐駒ヶ岳など南アルプスと、その手前に広がる低地側との互いの地形的ギャップを観て驚き、低地側をフォッサマグナと命名しました。このことを記念して、現在の八ヶ岳

獅子岩駐車場には、石碑に学術的価値が刻まれています。この平沢峠の場所こそ、日本列島の地質構造発達史の本格的な議論が開始された地点でもあるわけです。地形的に対立する付近を、北の糸魚川から南の静岡まで、南北に糸魚川-静岡構造線が走っており、この構造線は地質学的に日本列島を東西に二分し、同時に現在の知見としてはユーラシアプレートと北米プレートの境界として位置づけられています。地球上を見渡しても、海洋ではなく大陸や列島など陸上部においてプレート境界が走っているのは、本州中央部以外にはニュージーランド、アイスランドなどに限られており、地球規模からみても特異なプレート境界を、我々の身近に見ることが出来る、ということになります。

しかも、威風堂々と不動のようにそびえ立つ南アルプスは、20世紀後半の科学の進歩により、本来は平坦で甲府盆地と同程度の標高にあったものが、今から100万年前頃から隆起に転じ、現在の山々が形造られたことが理解できるようになりました。この事情により、南アルプスの頂き付近に、かつて地球上を広く覆った氷河の痕跡が残されている事実についても無理なく説明されるようになったのは、さほど昔のことではありません。このことを象徴する例として、北岳山頂部や仙丈ヶ岳などに生息するライチョウは、氷河時代以来生き延びてきている貴重な生物となるわけです。地球史の理解が進む中で、氷河時代の寒い時代から、現在のような比較的温暖な環境まで変遷してきている南アルプスは、ライチョウ以外にも多様な生物種が分布する点でも、地球上の貴重な領域となるわけです。

自然科学分野に限りません。このユニークな地形・地質を土台にして、我々人間の営みの中で南アルプスに特異な景観に価値を見出し、また自然と一体で工夫を凝らした先祖伝来の文化が構築されてきていることなどの点でも、この地域の重要な財産であります。

このような背景から、特にその科学的価値が再認識される過程で、平成25年9月には山梨・静岡・長野の3県に跨る南アルプス地域を対象に、ユネスコ・エコパークの申請に至ることが出来ました。平成26年度には正式登録になることが期待されています。さらに、その先には念願の世界自然遺産登録の道を目指すこととなります。

この南アルプスの豊かで貴重な自然は、一度壊れると復元することは容易でないことを多くの人々に認識されるべき、と思います。消極的な「自然保護」にとどまらず、未来まで見据えた積極的な「管理」という視点で、南アルプスに対する心ある活動が多くの人たちによって実践されることを願いつつ、南アルプスの自然及び人文関係の専門家から協力を得て、このたび一連の講演会を実施できました。また、この講演会には県民の多くの参加がありました。各々の講演の際には参加者から活発な質疑も交わされ盛大なものになりました。企画者として、以上の関係の皆様にご心から御礼申し上げます。

目 次

ごあいさつ	1
講演会のいきさつ	3
1. 南アルプスの山岳景観	
1-1: 南アルプスの景観と今日	7
1-2: 南アルプス山麓の文化的景観	15
2. 南アルプスの形成史の進歩と山麓遺跡	
2-1: 南アルプスの上昇史と氷河期の痕跡	25
2-2: 南アルプス山麓の治水・利水の文化と技術	35
3. 南アルプスの植物・森林の特性と保全	
3-1: 南アルプスの特異な植生	47
3-2: 南アルプスの山岳環境の保全	53
4. 南アルプスの動物生態を変化させる環境	
4-1: 南アルプスの動物相の特徴とその魅力	57
4-2: 南アルプスのライチョウの生息状況	61
5. 南アルプスの信仰と登山の歴史	
5-1: 民話や遺跡からさぐる南アルプスの山岳信仰	63
5-2: 登山史と文学からみた南アルプス	73

南アルプスの景観

南アルプス芦安山岳館館長 塩 沢 久 仙

*平地からの景観

平安時代の『古今和歌集』には、かひかね（甲斐の白峰）が「かいかねをさやにも見しはきゝれなくよこほりふせる小夜の山中」「かひかねをねこし山こし吹風を人にもかもや言伝やらん」と詠みこまれ、この時代から「かいかね」は都人の憧れの山だったに違いありません。

さらに、鎌倉時代の紀行『海道記』および『平家物語』巻十に「甲斐の白峰」が登場します。このように平安や鎌倉時代の南アルプスの情景は、歴史的背景から全て静岡から遠望したのですが、ここから見える白い山は「甲斐の白峰」ではなく、荒川、赤石なのですが、当時の人々は大らかに考え今の南アルプス全山を「甲斐の白峰」と考えていたのかもしれない。

時代が下って、文化年間に編纂された信頼おける甲斐の地誌『甲斐国志』には白峰三山や野呂川の様子が詳細に述べられ、山頂には四隅に鈴を懸け厨子に入った黄金の「日の神（大日如来像）」が祭られていて「風吹けば声あり」と記されています。この大日如来像の存在は1908（明治41）年、小島烏水が北岳山頂で「奉納大日如来寛政7年乙卯6月」と書かれた小鉄板を発見していることで、北岳は播隆上人によって槍ヶ岳が開山される33年も前に行者によって登られていたこととなります。

記録に残る北岳は、1971（明治4）年、芦安の行者名取直衛によって山頂に甲斐ヶ根神社が建立され、登山道が開かれました。以後1902（明治35）年、日本における「近代登山の父」と言われる、イギリスの宣教師W・ウェストンは2回目の来日で、「白根山は日光および草津の近くにある同名の火山と混同してはならない。この名は《白峰》が縮んだものである。その三つの峰は、冬のきらきら光る雪に覆われたとき横浜駅近くの地点、つまり、横浜から東京に向けて列車が発発して間もなく、直線距離にして約160キロ離れた地点から見る事ができる。」と記し憧れの北岳登山に向かいました。

鳥沢まで開通していた中央線を降り、笹子峠から「真西にある低い山々の上方に、三つ峰を持つ白根山の巨大な山容がそびえている、さらに甲斐駒ヶ岳の見事な花崗岩の頂上及び鳳凰山の尖峰がそびえている。」とこの景観を絶賛しています。現在でも初狩の集落を過ぎたあたりから、遥かに望むこの南アルプスの光景は、ウェストンの見た風景そのままに、

東京から四季を通じて訪れる、たくさんの登山者や旅行者達に計り知れない感動を与えているばかりではなく、雪解けの頃に鳳凰三山観音岳と白峰三山間ノ岳、農鳥岳に出現する雪形の「農牛」と「農鳥」は古くから農作業の目安として役立っています。また甲府盆地の西端にその大きな山容を南北に屏風のように広げているために、厳しい冬の季節風から甲府盆地の人々を守る役割を果たしています。このように南アルプスの存在や景観は様々な形で今日でも人々の生活や文化に係わっています。

この景観の主役である、白峰三山は北岳、間ノ岳、農鳥岳からなりいずれも 3000m を越える高山です。中でも北岳は 3193m で富士山につぐ本邦第二の高峰で、南東面には日本で最高標高の岩登りができる豪快なバットレスがあります。この連峰を三山と呼ぶものの一つ一つの山が大きく個性的なのでそれぞれを別の山として見ても決して他の山にひけをとるものではありません。

中央線が甲府盆地に下り、今度は釜無川の左岸を信州に向かう左手に、今までは遠く眺めていた、日本百名山の著者深田久弥に「日本一綺麗な頂上」を持つといわれた甲斐駒ヶ岳が、左中腹に摩利支天を従えて、起伏に富む早川尾根からオベリスクの尖塔のある歴史と信仰の山「鳳凰山」から前衛の楕形山、身延山地まで続き、右にはその名前のおりの山体を示す鋸岳が尾根を引いて、圧倒的な迫力で迫ります。山麓から一挙に 3000m の近くまでせりあがり、2400m もの高度差を持ち、これほど生活の場に肉薄する山はなく「山の団十郎」と呼ばれるにふさわしい存在感を示しています。またその後方には、甲府盆地に下る間に一度は姿を消した北岳がピラミダルな山容を見せてくれます。これらの光景は中央線とほぼ平行に走る中央道からも同様に望むことができます。

この中央道が伊那谷に入ると南アルプスは、山梨側の人里からは見ることでできない仙丈ヶ岳が左手に甲斐駒ヶ岳を従えて主役を演ずる、信州側の景観を提供してくれます。この山の後方には大きな白峰三山が横たわっているので伊那の人々は仙丈ヶ岳を白峰の前岳と呼んだのでしょうか、それとも左側にやや遠く離れてそびえる甲斐駒ヶ岳の前山と見立てたのか定かではありませんが、その山容は大きくドッシリとしていながら、昔は「前岳」と言ういとも即物的な名前と呼ばれていました。さらに伊那谷を南下してゆくと右手には中央アルプスが左手には塩見岳、荒川岳、赤石岳、聖岳と南アルプス南部の巨峰たちが顔を見せてくれます。この伊那谷での眺望点は、鹿嶺高原、陣馬形山、大西公園、夕立神パノラマ公園、風越山、しらびそ高原、下栗集落等枚挙に暇がありません。

このように、南アルプスの山々の平地からの景観は、笹子トンネルを抜けて甲府盆地から長野県境までは朝日に輝き夕日が沈み、岡谷から伊那谷を下って行くと、朝日が昇り夕日に映える姿をみせてくれます。

* 中間山地の景観

私達の祖先は古くは狩猟や漁労、採集によって生計を維持していましたが、縄文後期から弥生時代になって米を栽培するようになり平地に定住するようになりました。このため自然への働きかけは自分達の生活周辺の里山にだけに手を入れ、ヨーロッパのように牧草地に変えなかったために、中間山地の自然が世界で最も理想的な形で残ったと言われております。

「雪の北アルプス 雨の南アルプス」と言われているとおり、南アルプスはその位置からして他の日本の山地に比べて降水量が多く、しかも豊かな森に恵まれているために、蓄えられた清冽な水がいたるところで見事な溪谷美を作っています。また、前衛には山梨側で楕形、身延山地、伊那側では伊那山地が横たわっているために主脈まで行くのには一山越えたり、深い谷を渡らなければなりません。したがって、この前衛の山地の稜線からは、平地から遠望していた景観とは違い、まさに指呼の間に迫力ある主脈を望むことができます。その代表的なポイントとして、広河原、夜叉神峠、楕形山、牛首峠、三伏峠等が挙げられます。

このような気候条件と地理的条件のために、南アルプスの中間山地では太古の原生林が動物たちに良好な生息環境を与え豊かな生態系を形つくっています。また麓から 3000m の稜線まで、様々な樹種が規則的に配置されている、森林の垂直分布を学ぶ上でも貴重な地域です。

* 高山の景観

明治の中頃から近代登山が興り、眺めるだけであった高山は登山の対象として登山道や装備、交通網、ガイド等の環境が整備され、奥深い南アルプスにも人々が訪れるようになりました。その結果、自然科学の学術研究や山に親しむ精神活動によってもたらされる山岳文化のさまざまな情報が発信されました。そのことにより山岳自然環境の価値が再評価され、その保護活動の必要性が広く浸透し、乱開発に歯止めが掛かる一方では利用者のマナーは飛躍的に向上して山岳自然環境は安泰かに見えましたが、近年の地球温暖化傾向や野生動物たちの台頭による生態系の攪乱等新たな課題も見えています。

このような状況下であっても頂上を目指す体力、精神力は昔と変わらず要求され、時には登山を残念せざるを得ない場合も生じますが、それでも頑張って針葉樹林を抜けダケカンバ帯を通過してハイマツが現われる 3000m の稜線に立てば、そこには別世界の景観が用意されていて、登山に費やした全ての苦労が報われるほどの絶景が目の前に広がります。

このように南アルプスの主脈の 3000m からの眺望は殆どの場所から、南アルプスの巨峰たちに囲まれ、北、中央アルプスが同じ目線で捉えられると同時に。富士山は幾重にも

重なる南アルプスの山波みの彼方に直線距離約 10km を隔てて最も美しく捉えることができることも南アルプスの景観の特徴です。

南アルプスの稜線を歩いていると、世界にここにしか自生していないキタダケソウやタカネマンテマ、タカネビランジに代表される、いくつもの世界的に貴重な高山植物が咲き誇るお花畑が広がり、ライチョウやニホンカモシカ等の野生動物たちが遊ぶ、豊で多様性に富んだ生態系が形つくられ、甲斐駒ヶ岳や鳳凰山に見られる花崗岩の大断層崖、氷河の痕跡であるカールや周氷河地形は地球 46 億年の歴史を重く背負い、日本高山の生態系や景観の南限となっています。また、気象条件や光、地形の変化によって作り出される数々の雲、虹、ブロッケン等が山歩きにアクセントを付けてくれるでしょう。このように、山岳の自然美を作り出すさまざまな珠玉の要素が南アルプスには全て用意されていて、それらが縦横無尽にバランスよく影響しあいながら、四季を通じて人々の感性や美を意識する心の糸を優しく爪弾く見事な景観を作り出してくれています。このような素晴らしい景観を傷つけることなく未来に引き継いでいきたいものです。

以下には南アルプスを訪れる人々がその景観に等しく感動して、カメラに収める高山の代表的な人気スポットの一部をいくつかご紹介します。

- * 甲斐駒ヶ岳・・・鳳凰三山 北岳 仙丈ヶ岳 早川尾根
- * 鳳凰三山・・・賽の河原 北岳 白根御池
- * 仙丈ヶ岳・・・甲斐駒ヶ岳 北岳 仙丈小屋 早川尾根 南アルプス林道
- * 白峰三山・・・夜叉神峠 南アルプス林道 櫛形山 鳳凰三山 荒川岳
- * 北岳・・・広河原 池山吊尾根 中白峰 仙丈ヶ岳 早川尾根 鳳凰三山
- * 間ノ岳・・・南アルプス林道 トラバースルート 中白峰 塩見岳
- * 農鳥岳・・・南アルプス林道 吊尾根 塩見岳
- * 塩見岳・・・白峰三山 仙塩尾根 三伏峠 荒川岳
- * 荒川三山・・・塩見岳 千枚岳 赤石岳 百間平
- * 赤石岳・・・牛首峠 富士見平 荒川岳 千枚岳 兎岳
- * 聖岳・・・赤石岳 上河内岳
- * 光岳・・・イザルヶ岳 センジュガ原 光石
- * 富士山・・・北面と西面が南アルプスから殆どの場所から



北岳から甲斐駒ヶ岳



北岳から仙丈ヶ岳



北岳トラバースから富士山



北岳小太郎尾根の二重山稜



夜叉神峠から白峰



朝焼け北岳より



オベリスク鳳凰三山地蔵岳



キタダケソウと間の岳



ブロッケン



階状土・北岳小太郎尾根



牛首峠から赤石岳



原生林



光岳・光石



甲府盆地と南アルプス連山



荒川岳から赤石岳



三伏山から塩見岳



小海線から甲斐駒ヶ岳・鋸岳



上河内岳から聖岳



条線土（鳳凰山・薬師岳）



赤石岳から荒川岳



仙丈ヶ岳から北岳と富士山



仙丈ヶ岳藪沢カール



吊尾根から北岳バットレス



奉納大日如来像

南アルプス山麓の文化的景観

山梨県埋蔵文化財センター元所長 新 津 健

はじめに

今回の講演では文化的景観という視点に立って、南アルプスの山々とその山麓に広がっている景観～その地域独特の自然環境の中で、人々が日常の生活をとおしてつくりあげてきた風景～を取り上げてみたい。昨年は「信仰の山・富士の歴史」と言うテーマでお話ししたが、このたび世界文化遺産に登録なった富士山の価値も、実はこの文化的景観の視点がベースになっているのだ。同様な見方の中で、南アルプス山麓がとらえられないであろうか、というのが今回のテーマでもあるが、さらにまちづくりの中で「文化的景観」とか景観法に定める「良好な景観」を活用できないかという課題も提言していきたい。

1 文化的景観について

(1) 景観とは？

①風景外観・けしき・ながめ。また、その美しさ。

②自然と人間界のことが入りまじっている現実のさま。（「広辞苑」より）

*ラントシャフト（土地、空間＝ドイツ語）、ランドスケープ（景色、眺望、風景画、造園関連用語）などの訳語として、景観が用いられる。この用語や概念は地理学で用いられ、日本では昭和初期からこの研究が始まったとされる（金田彰裕 2012）

(2) 文化的景観とは→人と自然の共同作品

＝農村・山村・漁村地域の自然、歴史、文化を背景とした生活や伝統的産業にかかわる、その地域を代表する土地利用の形態・風土（月刊文化財 2003 定義の要約）

⇒例えば、急斜面を活用した段々畑・季節風が強い土地の防風林に囲まれた散村集落と水田など

～人々が生きてきたあかしの残る風景～

(3) 新しい文化財保護の分野～近年確立された新しい概念

平成4年 世界遺産の一つの項目として新たに導入された

- ・自然遺産～人の手ができるだけかからない状態～原生の自然地域を良とする
- ・文化遺産～長い歴史の中で人が作り上げ、良好に守られてきた状態が良とされる
- ・複合遺産～自然、文化両方の条件を満たすもの

*しかし、人が自然環境に手を加えながら、長い歴史の中で作り上げ、現在も息づい

ているすぐれた景観は、どのようなジャンルで取り上げればよいのか？⇒文化的景観

*文化的景観は国際的な制度（MABやラムサール条約等）で保護される自然保護地域

の周辺緩衝地帯としても大きな意義を持ちつつある。

(4) 日本国内での経緯～文化庁の全国所在調査で対象となった文化的景観の数

平成 12 年（一次調査）	2311 件
平成 15 年（二次調査）	502 件

この中からさらに 108 件を重要地域として選択、8 地域を試験的に詳細調査

平成 16 年 文化財保護法改正⇒「重要文化的景観」選定を取り込む

平成 25 年時点で全国 35 箇所が選定されている

(5) 文化財保護法にみる重要文化的景観

地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のため欠くことのできないもの

（文化財保護法第二条第 1 項第五号より）

(6) 文化的景観の基準

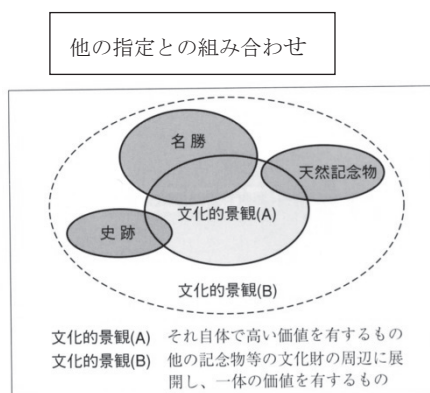
以下のような土地、生産物、施設、状態を対象とし、さらに信仰や芸術、独特な気象条件、文化財等との一体性などの特質が加わって、文化的景観の分類が行なわれる。

- ・農耕地～棚田や畑など
- ・採草、放牧地～茅野、牧場など
- ・森林の利用～用材林、防災林など
- ・漁ろうの場所～養殖いかだ、海苔ひびなど
- ・水の利用～ため池、水路、港など
- ・採掘、製造～鉱山、碎石場、工場群など
- ・流通、往来～道、広場など
- ・居住～垣根、屋敷林、建物など

【重要文化的景観のモデル】



（文化庁『魅力ある風景を未来へ』より）



（『月刊文化財』480号平成15年9月より）

(7) 重要文化的景観の実例

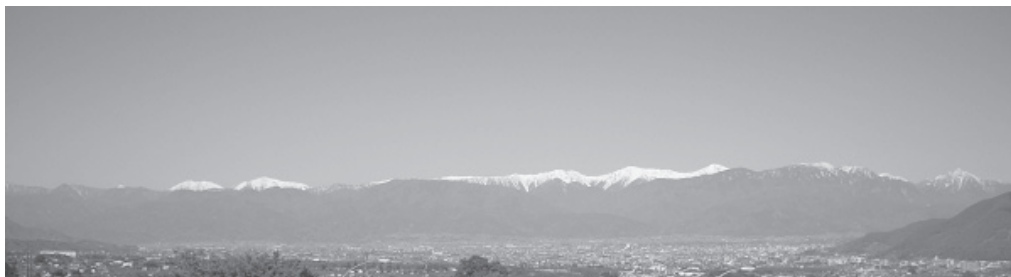
- ・近江八幡の水郷～ヨシ等の湿地植物とヨシ産業や集落景観（滋賀）
- ・姥捨の棚田（長野県）
- ・四万十川流域の文化的景観（高知県～源流域から河口まで5カ所）
- ・天草市崎津の漁村景観（熊本県）
- ・金沢の文化的景観 城下町の伝統と文化

など35件（2013年6月時点での選定件数）

(8) 文化的景観二次調査で取り上げられた山梨での事例

- | | |
|-----------------|-----------|
| ①屋代越中守館跡と水田 | ～水田景観 |
| ②勝沼の葡萄畑 | ～畑地景観 |
| ③松里のコログキを干す集落 | ～集落関連景観 |
| ④芦川村の石垣 | ～集落関連景観 |
| ⑤甲府盆地の霧 | ～独特の気象景観 |
| ⑥信玄堤 | ～文化財周辺の景観 |
| ⑦徳島堰取水口と円井集落の水田 | ～複合景観 |

2 南アルプス山麓の景観を探る



（笛吹市・甲州市、釈迦堂遺跡博物館からの遠景）

(1) 独特の気象条件に関わる景観～雪形と農耕

南アルプスの雪が融けはじめると、雪形が徐々に現われてくる。土地の人はこれを見て耕作を始める。今も昔もかわらない農事暦。まさに土地と人との暮らしが結びついている。



鳳凰三山観音岳の農牛

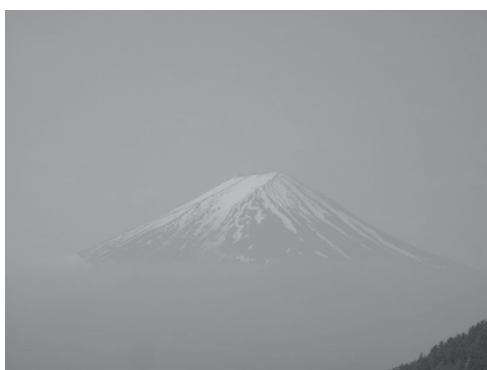


白根三山農鳥岳の鳥形

一 鳳凰山 駒ヶ岳ノ東南ニ在リテ芦倉山ノ北少シク西ニ在リ (中略) 地藏・観音・薬師ノアル所ヲ三岳ト云フ (中略) 此ノ山ノ面ニ春三月頃ヨリ雪消テ消エ残リタル雪自然ニ牛ノ形ヲ作ス処アリ土人望デ農侯トシ農牛ト称ス (『甲斐国志』山川部第十一)

一 白峯 此山ハ本州第一ノ高山ニシテ西方ノ鎮メタリ (中略) 南北ニ連ナリテ三峯アリ其ノ北ノ方最モ高キ者ヲ指シテ今専ラ白峯と称ス (中略) 中峯ヲ間ノ岳或ハ中ノ岳と称ス此ノ峯下ニ五月ニ至リテ雪漸ク融テ鳥ノ形ヲナス所アリ土人見テ農侯トス故ニ農鳥山トモ呼ブ (後略) (『甲斐国志』山川部第十四)

富士山の農鳥



一四五月ノ比山上ノ雪消ル時遠望スレバ牛ノ形ニ消ノコ
リ或ハ鳥ノ形ニ残ル是ヲ農牛・農鳥ト云フ農人此ヲ見テ
稼穡ノ時ヲトス駿河ノ方ニテハ農馬ト称ストゾ南面ハ
馬形ニ消エ北面ハ牛形ニ消ルモ方位ニ從ヒ自然ノ理ナ
ルベシ

(『甲斐国志』山川部第十六ノ上)

(2) 水がつくる景観～治水・利水

南アルプスを源流とし、次第に水量を増す釜無川。かつて甲府盆地を自在に流れ氾濫を繰り返した大河川。水の制御は人々の暮らしと耕地の開発に直結する。釜無川や御勅使川などには、先人の労苦が積み重なった治水施設が残る。今なお生きる伝統の景観でもある。

①信玄堤と周辺の集落～信玄堤は、文化庁の景観種別にて「文化財周辺の景観」に分類されている。実際には、永禄3年(1560)には完成したとされる信玄堤本体とそれを維持管理する竜王河原宿、江戸初期構築の下流堤、今も続く神事の御幸祭り、そして周辺環境も含めて治水景観ととらえることができる。



(釜無川と南アルプス～聖牛のある景観)



(信玄堤・歴史的な出し)



(今も続く川除け神事～御幸さん)

②御勅使川堤防群～六科将棋頭と水田・集落

御勅使川扇状地には、旧河道もふくめて堤防施設が今なお数多く残されている。それらは複数が組み合って、奔放に流れる水流を制御するとともに、下流域の集落や水田を護っている。近年の研究では、将棋頭とは堤防に囲まれた三角州状の内部に形成された集落や水田を護る役割が強調されている。釜無川堤防群と併せて、南アルプス山麓に特徴的な治水・利水の景観でもある。



六科将棋頭の石積



将棋頭で囲まれた地域内の水田

(3) 水田と集落景観

山麓の段丘や扇状地にも水田が営まれている。それには大小の水路が大きな役割を果たす。特に円野町上円井の釜無川から取水され、山際の段丘から御勅使川扇状地を横切って17^{km}も続く「徳島堰」の功績は絶大である。江戸時代寛文10年(1670)、徳島兵左衛門、矢崎又右衛門を始め多くの人材により完成したこの堰は、今なお乏水地帯に豊かな水を提供している。

徳島堰沿いに発達した集落と水田は、まさにこの地域独特の自然環境に人の力が加わって形成された文化的景観である。この取水や維持管理には、これを利用する人々のさまざまな苦労や軋轢も物語られている。

①徳島堰と水田



滔々とながれる徳島堰



堰の下方に広がる水田

②山麓の棚田



急峻な楕形山麓には棚田が発達している。地形に合わせて石垣を積み細長く形成した水田には、谷筋からの水を効果的に流す。今年も田植えの時期がやってきた。

(4) 山間集落景観

南アルプス前衛の山間には、特色ある山村が点在する。今回は高尾集落と赤沢集落を紹介する。

①高尾集落 楕形山中腹の標高 800 ㍉程の地にある。麓からは古道「高尾道」が残る。村中には山村景観の様相が漂い、穂見神社域は森閑としている。鎌倉時代天福元年（1233）銘の銅製懸鏡御正体には「三躰王子甲斐国八田御牧北鷹尾」とあり、ここが八田牧に含まれていたことがわかる。11月30日穂見神社夜祭は今も行われており、歴史的にも民俗学的にも一体となった集落景観である。



屋敷景観(左) 穂見神社参道(右)

②早川町赤沢の集落～重要伝統的建造物群が醸し出す景観～

身延山から七面山に至る信仰登山の拠点集落として発達した赤沢集落。道路沿いに展開する宿泊施設や傾斜を活用した家並みなどが特徴。現在旅館はわずかになってしまったが、かつての建物も良好に保存されており、信仰の宿場といった雰囲気がよく残されている。平成 5 年に国の重要伝統的建造物群に指定され、現在も住民や町の努力によってその景観は良好に保たれている。身延山、七面山と一体になって信仰に関わる歴史的景観を語る事ができる。



赤沢の景観

(5) 山への信仰を物語る歴史景観

山への信仰は山岳信仰とも呼ばれ、古代からその存在は知られている。特に仏教導入以降に発達した修験道が有名である。大峰・金峯山信仰を中心に、噴火の収まった平安時代以降は富士山もその拠点の一つとして隆盛を極めた。江戸時代には一般の人々を取り込み、山への信仰は一層ひろまり、あわせて日本各地の未踏峰の開山も進む。

南アルプスの山々も山麓の人々の信仰と深くかかわってきた。そのいくつかにふれてみよう。

① 縄文集落と山



八ヶ岳山麓に広がる金生遺跡の配石遺構



金生遺跡の復元住居と甲斐駒ヶ岳

縄文人が山に対してどのような祈りの心を持っていたのかはわからないが、大泉町金生遺跡の配石遺構からは立石や石棒などが目立って出土した。この遺跡からは、南に富士山、北に八ヶ岳、西に甲斐駒ヶ岳や地蔵岳の岩峰、東には金峯山の五丈岩などを望むことが出

きる。このような立地を選んだ縄文人が、これらの山々を意識していたとも推測されている。特に、冬至の頃金生遺跡の立つと、太陽が甲斐駒ヶ岳の頂上に沈むことが観察されている。この頃を境に、日足はのび春に向かうことを縄文人は知っていたのだろう。だからこそ、一年の節目の目盛を甲斐駒頂上としたのである。遺跡からみた太陽の運行と山との関連は、全国各地で報告されている。韮崎市女夫石遺跡では春分秋分の日没が地蔵岳に入ることが確認されており、事例は今後増えるであろう。



(冬至日没写真 廣瀬公明氏撮影)

② 甲斐駒ヶ岳開山

江戸時代文化 13 年、諏訪の延命行者鑄弘法印によって開山されたと伝えられる。以後、修験者の行場として活用されるとともに、信州・甲州・江戸を中心にさまざまな講が組織された。「豊作」「病魔退散」「家内安全」などの祈願のため、先達に導かれての参詣や登山が盛んになったり、山頂や支峯に多くの石造物が奉納されたという（宮崎吉宏 1995）。明治維新以後、神仏分離により修験道そのものは廃止されたが、駒ヶ岳信仰はいまなお続いている。駒ヶ岳に向かう古道沿いには石造物が残り、二つの駒ヶ岳神社には信仰の歴史が積み重なっている。山に向かうにつれ、信仰の景観が色濃くなっていく。



白須の古道に残る石造物と駒ヶ岳



竹宇駒ヶ岳神社；講社が納めた石造物

③さまざまな山への信仰記録

- ・『甲斐国志』白峯の項に次のように記されている。

「相伝フ山上ニ日ノ神ヲ祀ル其ノ像黄金ヲ以テコレヲ鑄ル長サ七寸許リ（後略）」

白根三山が信仰の対象となっていた可能性も窺われる。

芦安町の諏訪神社蔵「大日如来坐像」は北岳山頂の岩窟に安置されていたとも伝えられる（『芦安村誌』）。この像は鎌倉時代に制作された御正体の本尊であると報告されている。

（南アルプス市教育員会 2011）

- ・地蔵岳からも御正体（懸仏）や古銭等の出土が記録されており（『芦安村誌』）、この山塊も修験の場として古くから登られていた可能性が高い。
- ・南アルプス前衛の山々も、麓の人たちにとって信仰の場となっていた例が多い。その一つ韮崎市苗敷山は湖水伝説や豊穰ともつながる信仰の山として有名である。平安時代の住居や遺物も発見され、古くから信仰の場であったことがわかる。現在も穂見神社の神事が行われており、優れた自然環境と信仰の痕跡が保たれた文化的景観の地でもある。

この山の背後には現在も地蔵信仰が息づく鳳凰三山が聳えており、この地も先にふれたように修験を始めとした信仰の場として生かされたものと思われる。麓からみる雪形「農牛」とともに里人との縁の深い山でもある。

*以上は、甲斐側からみた南アルプス山麓の文化的景観の事例である。長野県の伊那方面にも、土地の歴史や民俗行事に裏打ちされた景観が数多く見られるものと思われる。これらを総合的にとらえることにより、南アルプス地域の文化的景観が評価されるだろう。

(6) 富士山の世界文化遺産～信仰と芸術からみた景観要素

世界文化遺産「富士山」の価値のベースは、文化的景観でもある。信仰と芸術の源泉及び展開がその景観に現れているのだ。火の山故の神仙境から修験の山へ、そして大衆信仰の場への展開。独立峯の美しさと高山としての顕著な自然環境から生まれた芸術価値。それらが今なお息づく富士山総体が、まさに文化的景観として我々の眼前にそびえたち、富士山麓に生きた人々の歴史をそこに見ることが出来る。富士には富士の、南アルプスには南アルプスの、それぞれにかけがえのない景観がかたちづくられる。ここでは参考までに、富士山景観の一端にふれてみる。



① 優雅な富士と山麓の景観



② 富士山神宮并麓八海略絵図 (富士吉田市歴史民俗博物館)

・富士山は、独立して聳える均整のとれた美しい山として、また高山ゆえの可視域の広い山として、歴史的にも地理的にも多くの人々の心を引付けてきた。絵画として数多くの作品が生み出され、今なおその魅力を追い求める人は多い。まさに芸術の源泉でもあり、19世紀後半の西欧美術に大きな影響を与えた「ジャポニスム」の要素の一つにも、富士を題材とした浮世絵などの構図や色彩があげられている。

信仰の上では、富士の特徴である火と雪との共演は、古代の人々に神の住む神仙境のイメージを抱かせた。噴火が収まった平安時代以降そこは修験の山となり、さらには戦国から江戸時代を経て一般大衆の登拝を盛んにした富士講が栄える。3776 呎という標高は、麓から山頂にかけて地勢や植生の変化を生み出している。そこに実現する「麓集落→草山→木山→焼山」という環境の推移を、人の住む世界から神聖な森林へと突き抜け、そして草木の全くない焼けた砂に覆われた神や仏の世界への昇華と表現し、心象世界が作り上げられた。コニーデ型に聳える単独峯の富士だからこそ、直線的な表現が可能になった曼荼羅世界なのである。上図②には、麓の御師町から浅間神社を経て草山・木山境の馬返しから神聖な山に入り、やがて雪に覆われた神仏世界へと続く「吉田口登山道」の道程がしっかりと表現されている。麓には、登拝のために身を清める禊の場である「八海」も描かれている。まさに信仰にかかわる文化的景観である。これらの場は、今もなおその歴史環境・自然環境共に良好に残されており、世界文化遺産としての資産を構成している。

3 文化的景観の視点と活用

以上、南アルプス山麓を中心に、文化的景観としての要素を概観してきた。世界文化遺産にもかかわる「自然と共生する中で育んできた原風景」(文化庁『魅力ある風景を未来へ』)という新しい捉え方が、この考え方の根底にあるのだ。しかも文化的景観とは、長い歴史の中で形成されてはいるものの、今も継続して生き続けていることを特徴とする。いわば地域の現状を語る顔なのであるが、さらに将来へと伝えていく課題もある。以下に今後の視点を整理し、まとめとしたい。

- ・ 地域にはそれぞれ独自の風景がある。
- ・ それは日常生活がつくりだした風景であり、自然と人との共生の成果とも呼ばれる。
- ・ でもその景観は、固定的ではなく流動的な側面も持つことから、使い続けることが保護・保全につながる。
- ・ そのため、絶対守り後世に伝えなければならないベースと、許容範囲を明確に定めておく必要がある。
- ・ 箇所の選定や保護策、活用策にはそこに生きている人々を含め、地域の人々が積極的に関わることを求められる。
- ・ 個々の土地や建物は私有の場合でも、景観としてはきわめて公共性が高いものである。
- ・ 文化的景観への取り組みは、まちづくりへの一歩でもある。景観法との連携を活用。
- ・ みんなで地域を見つめなおしてみよう

引用・参考文献

芦安村 1994 『芦安村誌』

『甲斐国志』 雄山閣

金田彰裕 2012 『文化的景観』 日本経済新聞出版社

『月刊文化財』 9 2003

文化庁 『魅力ある風景を未来へ』

文化庁文化財部記念物課 2005 『日本の文化的景観』～農林水産業に関連する文化的景観の保護に関する調査研究報告書～ 同成社

南アルプス市教育委員会 2011 『祈りのよこがお』

宮崎吉宏 1995 『駒ヶ岳開山』 山梨日日新聞社

本中眞 2012 「重要文化的景観は、まちづくりやむらづくのキーワードになれるか？」『月刊文化財』 11

山梨県教育委員会 2012 『富士山』 山梨県富士山総合学術調査研究報告書

南アルプスの上昇史と氷河期の痕跡

山梨県立大学 輿水達司

はじめに

日本列島の中央部には大きな山脈として、飛騨山脈・木曾山脈・赤石山脈が連なり、これらが総称され日本アルプスと呼ばれている。一方で、これらの山脈は北から順に、北アルプス(飛騨山脈)、中央アルプス(木曾山脈)、南アルプス(赤石山脈)とも呼ばれている。本講演で対象にしている南アルプスは、甲斐駒・鳳凰山系、白根山系、赤石山系にわたる3つの大きな山系によって構成されているものである。

こうした山々の形成プロセスについて、古くは、と言っても今から40~50年ほど前までは、地向斜造山という理論体系によって説明されていた。すなわち、上下の重力運動に主たる要因を求めて、山地形成を含む自然の成り立ちが理解されてきた。ところが、1960年代に地球科学では革命的なパラダイムとして、地球表層部が水平的に運動する、という大変換が提示され、その後現在までに地球表層部の地形・地質が合理的に理解できるようになってきている。プレート・テクトニクスであり、今ではプルーム・テクトニクスに発展してきている、地球上の火山活動や造山運動などを統一的に説明する学術理論である。

この経緯で、南アルプスに分布する地層には、日本列島の土台を構成する普遍的な情報が含まれていることが理解できるようになった。しかもその過程で、南アルプスの形成史において特徴的な地質現象でもある、日本列島中央部の屈曲する独特な地形・地質の成り立ちも理解できるようになってきた。つまり、今から130年ほど前にナウマン博士によって、日本列島形成史が総括された中にも示されている、本州中央部の屈曲した地形・地質の構造について、その屈曲の要因が、ようやく今から20~30年前にプレート・テクトニクスの視点から合理的に理解できる状況になった。このような地球科学分野の理解が進行する過程を踏まえながら、私の講演では富士火山の成り立ちとの違いも意識しつつ、南アルプスの形成史を歴史科学的に紹介してみたい。

日本列島の土台形成史と南アルプスの地質

日本列島を広く見渡してみると、九州から関東地方にかけて概ね東西方向に、幾つかの帯状の地質群の分布が認められ、そのうち最も南側(太平洋側)に四万十帯が発達している。この帯状の地質群、すなわち日本列島の土台の検討からその形成過程については、1980年頃を境に飛躍的な進展が図られた。この背景には、地層中に含まれる放射虫化石の時代判定や、プレート・テクトニクスに基づく付加体の概念が確立してきたからである。

一般に、海洋プレートが大陸プレートの下に沈み込む際に、海洋起原の堆積物が海洋プレートから剥ぎ取られ、これに加えて大陸側からの堆積物も一体になり、大陸プレートに

次々に押し付けられて積み重なって付け加えられていく。その作用を「付加作用」と呼び、堆積層の積み重なったものを「付加体」と呼んでいる。海溝では新しい付加体が次々と形成され、古い付加体の下にもぐりこみながら大陸側へ付加していく(図1)。

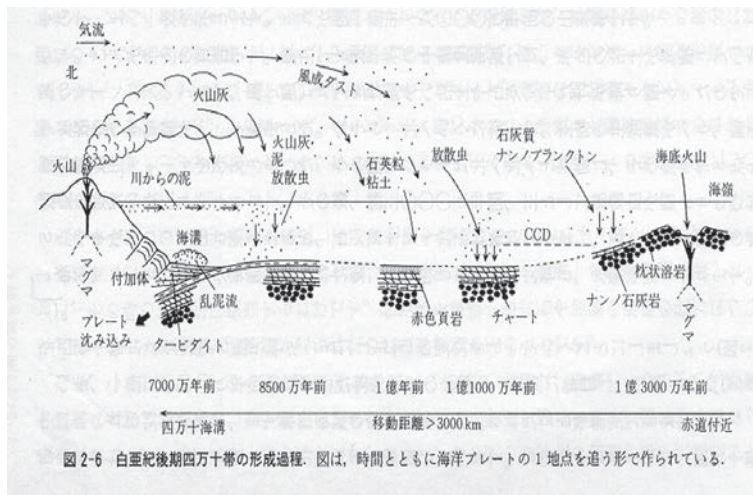


図 1 : 付加体地質の形成概念図 (平,1990)

日本列島の骨格は、基本的にこの付加作用によって形成されてきた。すなわち、かつて3～4億年に遡る古生代から、大陸の縁片から運搬された土砂や岩石と、さらに海洋プレートの堆積物が剥ぎ取られ、これらがアジア大陸の東縁に付加してきたのである。それゆえ、西南日本に分布する付加体は、日本海側から太平洋側に向かってその時代は順次若くなっており、古生代後期～中生代三畳紀の日本海側に対し、太平洋側では中生代白亜紀に形成されている。白亜紀後期以降における日本列島の地質学事件（後述の日本海形成・縁海の拡大など）を経て、現在に至るなかで、日本列島の最も太平洋側にフィリピン海プレートの沈み込みによる四万十帯の付加体が形成されてきた。そして、フィリピン海プレートが沈み込む南海トラフにおいては、現在でも付加体の形成が進行中、という状況にある(図2)。

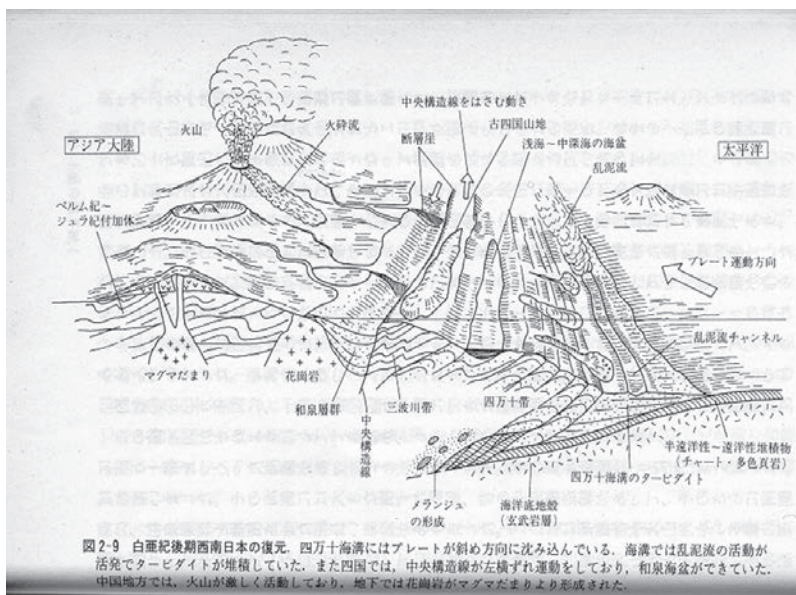


図 2 : 付加体システムによる日本列島土台の形成概念図 (平,1990)

日本海の形成と南アルプスの地質

概ね3億年前から約1500万年前にかけて、プレートの沈み込みに伴って成長してきた日本列島の土台は、その当時から現在の場所に存在したのかといえ、そうではない。この点については、1980年代以降の「古地磁気学」などの研究によって、日本列島の成り立ちや日本海の形成史の理解が著しく進んだ研究から説明される。

そもそも日本列島の土台の形成場所は、現在の朝鮮半島付近からロシア・極東の沿海州付近にわたるアジア大陸の東縁部に、ほぼ直線的な形態で存在していた(図3-(a))。古地磁気学の1980年代における特に地層に記録された「偏角」の研究によって、概ね1500万年前(あるいはそれ以降)には、それまではアジア大陸東縁にあった日本列島が、現在の西南日本は時計回りに、また現在の東北日本は反時計回りに回転し、アジア大陸から完全に離れ、現在の位置に移動したことが理解されるようになった(図3-(b))。こうして、地層の水平移動に関する古地磁気学から導かれた研究は、日本海誕生史の解明にも貢献したわけである。

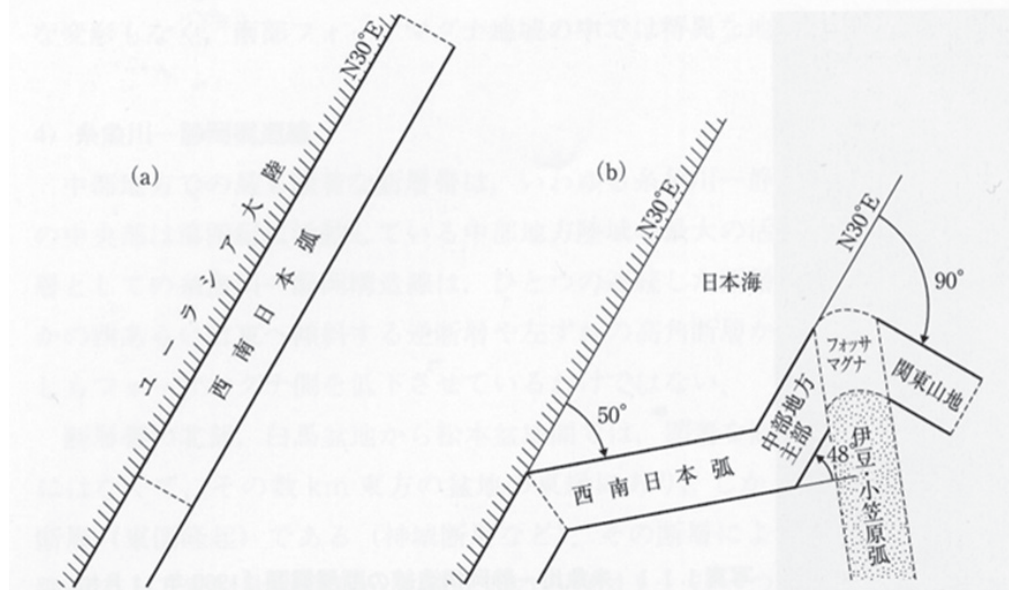


図3：日本海の形成過程と本州中央部の屈曲過程 (松田,2006)

南アルプス地域の上昇

アジア大陸から離れ、日本列島が現在の位置に移動したことに加え、その頃にはさらに大きな地質学事件が本州中央部でおこった。つまり、アジア大陸東縁部から離れて移動する西南日本の東縁部は、日本列島の南に位置し徐々に北上する伊豆—小笠原弧に衝突することにもなった。

これらの現象を南アルプスおよび周辺域に存在する具体的な山地名で説明すると、西南日本の東縁部の前面には赤石山地が位置し、一方で、伊豆—小笠原弧の前面部には北に向かって順に、丹沢山地、御坂山地、櫛形山地が位置しており、とりわけその最前部(北端部)

には楯形山が位置し、これら山地が次々に日本列島側（東縁部）に衝突していたことになる。この一連の衝突については、「多重衝突」などと呼称されている。その結果、本州中央部は屈曲した地質構造になり、南アルプス地域はまさにその影響を端的に受けた地域になっている。同時に、この地質学事件によって、フォッサ・マグナも形造られたのである(図4)。

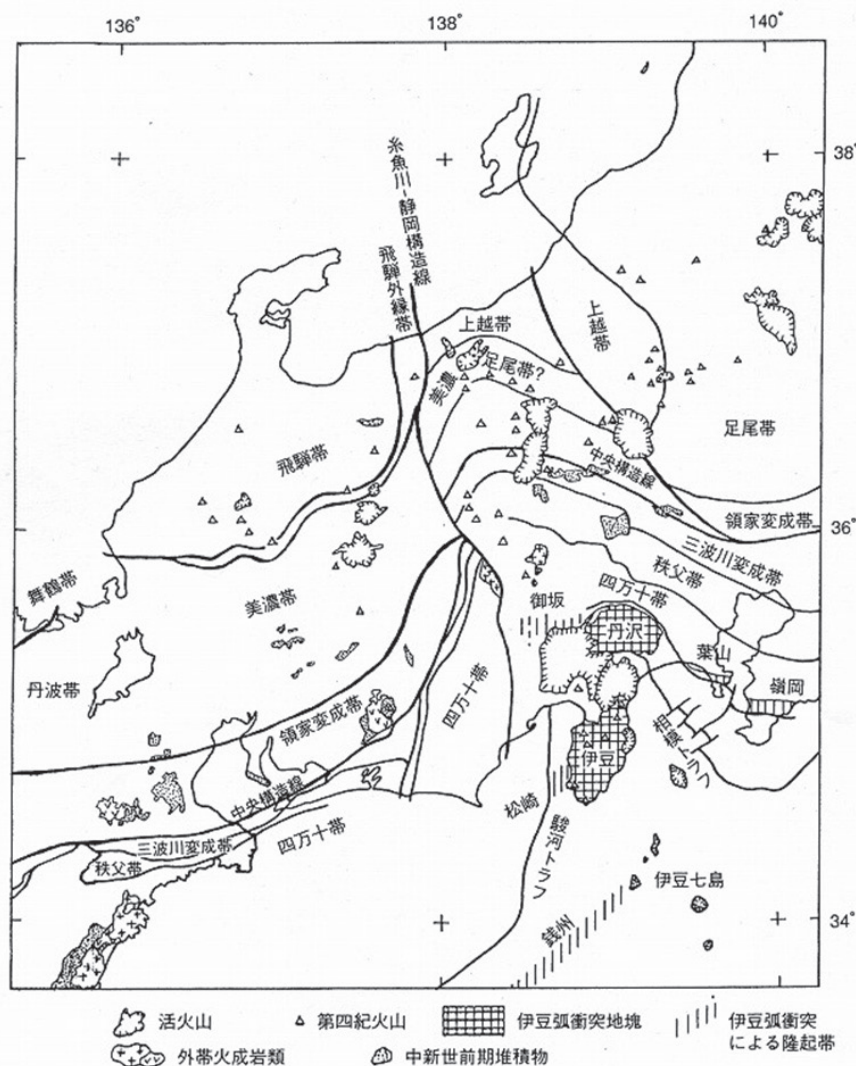


図 I.1.3 伊豆弧衝突による中部地方帯状構造の大屈曲

図4：本州中央部の地質構造図（新妻,2006）

以上を要約すると、アジア大陸から日本列島が離れる動きがあり、さらに北上するフィリピン海プレートや太平洋プレートの水平移動などによって、南アルプス地域は激しい衝突及び圧縮の場にさらされた。その結果は、糸魚川—静岡構造線や本州中央部における逆「く」の字型の屈曲構造の形成のみならず、南アルプス地域が今から 100 万年前頃から急激な上昇域に転ずることにもなった。

早川町付近に発達する富士川層群中の曙層（図5）には、この地域が海域から陸域へ転じた環境推移の様子が、地層に含まれる貝殻化石に加え礫岩の存在からも読み取れる。つまり、貝殻の化石からは、この場所が当初においては海的环境であったことが、また礫岩の存在からその背後における急激な上昇域（山地）から下流域への砂礫の供給、といった過去の環境が、これら地層の構成物から読み取れるわけである。



図5：早川橋付近の小原島貝化石

衝突や付加作用によって、海域から陸域に転じ、その後の上昇域に至る変遷は勿論、上昇の速さについても、具体的に赤石山地における監視データから、年間3～4mmというスピードが報告されている（檀原,1974 など）。もしも、現在の監視データから求められる隆起速度が、100万年前頃に遡った過去から現在まで、同じスピードで赤石山地（南アルプス）が上昇を継続したと仮定した場合、3000mの山地隆起については矛盾なく説明できる。

ところで実際に、3000メートルの南アルプスの山々に足を運ぶことで、日本列島が古い付加体に順次若い付加体が貼り付けられ、山地として成長をし続けてきた様子を観察することも可能になる。例えば、南アルプスの北岳山頂付近に分布する海洋玄武岩は中央海嶺付近から、また北岳の山頂付近の北岳山荘（山小屋）周辺に分布する石灰岩（図6）やチャートは、中央海嶺（赤道付近）よりも幾分北上した海山付近や大洋底から、それぞれプレートに乗って日本列島にやってきたものである。

ここに紹介したのは南アルプス地域を中心とした研究の一例であるが、結果として日本列島形成史が新しく大きく塗り替えられた。この学術進歩の基本を支えたものは、地球表層部が水平的に移動する、という発想である。この発想方法に加え、さらに時系列的（歴史科学的）な情報も加味し、大地形成の仕組みの合理的理解へと進展してきたわけである。



図6：南アルプス北岳山頂付近の石灰岩と高山植物（タカネマンテマ）

いずれにしても、この南アルプスの上昇スピードは、本邦のみならず、世界でもトップクラスの速さとなる点は特筆される。以上の地質学過程によって、南アルプス地域で最も高標高域に位置する北岳、間ノ岳、農取岳の基本形ができたのである。

南アルプスに残された氷河地形

南アルプス地域の地質特性は、急激な隆起現象が筆頭に挙げられ、さらに測地測量データから現在も隆起が継続していることが示される。この経緯から、本州中央部に 3000m 級の山々が約 100 万年の中で出来たことを踏まえると、今から 10 万年～20 万年前には概ね現在に近い山の姿を示していたことが想像できる。こうした山々の形成プロセスに加え、さらに太陽系の中の惑星としての地球について考えてみると、本来経験してきている寒・暖の気候変動リズムの反映・影響がこの南アルプスにも重なり、その結果、我々は南アルプス地域に氷河地形の痕跡を知ることができる。この氷河地形ができる点を理解するため、以下に地球規模の気候変動の仕組みの要点を述べる。

地球の気候の変化を地球史のレベルで遡ってみると、過去から何回も地球には寒・暖の気候変動が繰り返されてきている。このうち比較的寒冷な時期を「氷期」、温暖な時期を「間氷期」に区分されており、現在は間氷期にあるとされている。最も近い過去の「氷期」のピークは約 2 万年前にあたり、この頃の寒冷気候の時代を最終氷期と呼ばれている（図 7）。

日本列島中央部の南アルプスは、現在では「温暖な地域」に位置しているものの、最終氷期の頃には、既に現在に近い山地が形造られ、しかもこの最終氷期頃には寒冷な気候で

あった。このため、南アルプス地域を含む広い範囲には、氷河によって造られた地形が記録されているわけである。

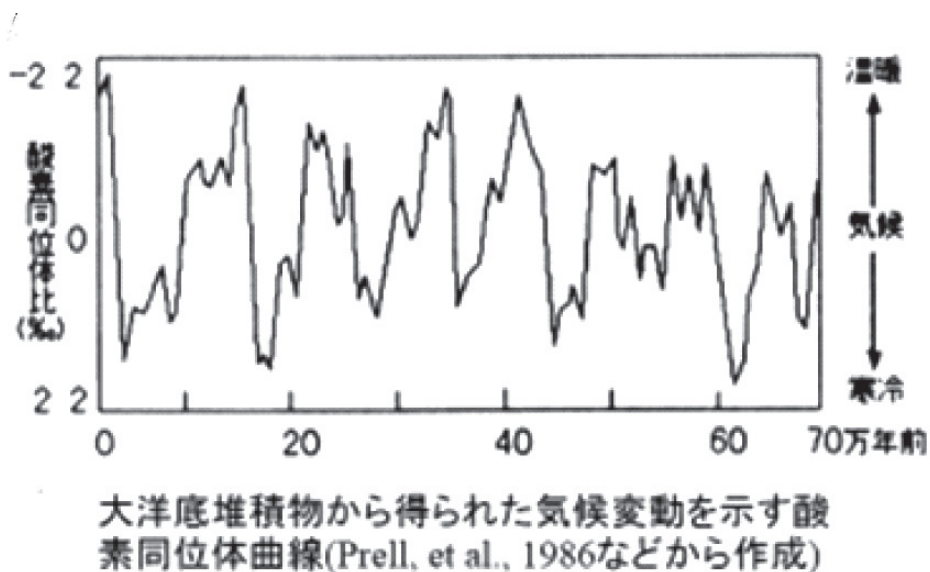


図7：過去から現在にわたる気候変動曲線（輿水,2010）

もちろん、約2万年前の最終氷期の時代には地球全体が寒冷化したため、海においては海水面の低下といった現象が、その一方で陸地においては地球上の高緯度や高標高など広い範囲にわたり氷河が、それぞれ認められたわけである。それゆえ最終氷期の日本列島において、北海道や本州中央部の高標高地域において山岳氷河が発達していた。



図8：仙丈ヶ岳山頂付近のカール地形（氷河地形）

とりわけ、本州中央部の中で南アルプスにおいて、この氷河地形が残されており、しかも、この氷河地形の存在が日本列島内で南限という点で一層重要となる。

氷河地形が南アルプス地域に現在においても認められる場所としては、仙丈ヶ岳（図8）、間ノ岳、荒川岳、東岳などである。このうち、間ノ岳付近においては東側斜面に北沢カール、細沢カールが、また西側には三峰岳付近になるが左俣沢カール、東沢俣沢カールが確認されている。なお、荒川岳の南側でみられるカールは、日本で確認されている中で最も南に位置するため、特筆されるものである。これ以外に、氷河に關係して造られた地形としては、氷河によって地表が削られ運搬され、その後に堆積したモレーンなども南アルプスの高標高地には認められる（図9）。さらに氷河周辺の特に寒冷地域にみられる地形としての周氷河地形にまで対象を広げると、これらは南アルプスの各地で多数認められる。



図9：仙丈ヶ岳のモレーン堆積物が写真左下側の高まりの地形として観察できる

氷河期から後氷期へ

地球の歴史の中では以上に述べた最終氷期の後、概ね1万年～9千年前を境にそれ以降、気候は相対的に温暖化傾向に進み、後氷期あるいは間氷期と呼ばれる時代に私達は生きているわけである。この約1万年の中で、それ以前の寒冷期に比べ確実に地球は温暖期に向かうことになる。その結果、かつて氷河作用が記録された南アルプスの高標高地域は、氷河の融解等によって、あるいはその後の温暖期における活発な降雨現象によって、地層に記録された当時の氷河の記録の多くは消滅してきている。こうした、地球の気候変動を考慮したときに、地層に刻まれた南アルプス地域の氷河時代の面影は、貴重なものである。結果的に、現在我々が眼にしている南アルプスの地形の全体的な姿は、氷河の影響よりもむしろ、間氷期における降雨によって、その地形の主体が作られた、ということにもなる。

現在も活発に隆起を続けている地域であり、当然の成りゆきとして、南アルプスでは山地の崩壊が多く発生し、特に地震などの力が働くと一層崩壊現象が生じ易くなる。また、このような山地が壊れていく現象と共に、降雨（や降雪）の作用を基本とする侵食・運搬・堆積のプロセスが活発におこなわれてきたのも、この地域の地形形成と堅く結びつく重要な現象である。すなわち、隆起する山を削りこんでV字河谷を形成しつつ、土石を運搬し、その先における堆積作用の様子を文化的な側面からの紹介については、本講演会では斎藤秀樹さんが「山麓地域の治水・利水」の点から詳しく触れます。

富士山との比較および南アルプスの地形・地質の特性

最後に、その標高の点では本邦ナンバーワンを譲る富士山と、今回の対象とした南アルプスを地質学的に比較した場合、富士山については古御岳火山の時代を除く、厳密な富士火山としては、10万年前以降の火山活動のなかで出来たものである。現在我々がみている富士山の姿は、今から一万年あるいはそれ以降にできたものである。言うまでもなく、富士山と南アルプスは、山の成り立ちの仕組みとして、一方は火山活動であり、他方は造山運動という大きな違いがある。この事情ゆえに、富士火山の10万年の年代幅に比べ、南アルプスを構成する地層・岩石は遥かに長い地質時代にわたるものであり、そこに記録されている情報量には根本的な違いがある。

以上に述べた地質・地形の点から、南アルプス地域を整理してみると、確かにその成り立ちの基本過程はプレート・テクトニクスに基づく付加体地質にある。すなわち、赤石山地の成り立ちは、他地域における日本列島と同様に、日本列島の骨格形成史の普遍性を備え、付加体という共通した地質構造によって理解できる。しかし、共通性のみではない。赤石山地一帯が、圧縮・変形とそれに伴う急激な隆起などの特異な性格を持つ理由としては、今から約1500万年前における日本海の形成や、その後における南側からの櫛形・丹沢・伊豆地塊などの衝突現象が挙げられる。この衝突現象こそが、地球上に類をみない言わば島弧と島弧が直角に衝突しているものである。結局、日本列島形成過程の基本形を示すと同時に、加えて日本列島中央部の特異な屈曲地質構造が現在も形成中、という地球上でも極めてユニークな地域が南アルプスである、ということになる。

こうしたプレート運動は将来も継続し、とりわけ南アルプスの南方の遠州灘から九州に至る南海トラフといった現在の海底域は、いずれ陸域化するわけである。このような悠久な時間スケールの中の一瞬に、我々は生きているということに思いを巡らすと同時に、我々は地球上極めてユニークな自然現象を身近に見ている、と言えるのではないだろうか。

参考資料：興水達司（2010）南アルプスの生い立ち・南アルプスの地形・地質，南アルプス概論 山梨県版—南アルプスの自然と人々の関わり—，南アルプス世界自然遺産登録山梨県連絡協議会学術調査委員会，7～17.

南アルプス山麓の治水・利水の文化と技術

南アルプス市教育委員会 齋藤 秀樹

はじめに

21世紀は「水の世紀」とも呼ばれる。水資源の獲得や分配、異常気象による洪水、旱魃の増加など「水」を中心として、世界の政治・経済・社会が動きつつある。世界文化遺産の富士山では湧水や富士五湖に代表されるように「水」資源も豊かであるが、南アルプスの山々はまさに里の「水」の源であり、この水が人々の生活の枠組みを決めてきたとも言える。これからの社会を考えるみちしるべとして、「山」と「水」をキーワードに、南アルプス山麓で培われた治水・利水の歴史・文化の一端を紹介したい。

1. 南アルプス市の地形

(ア) 伝統的な4つの地形区分。

- ① **山方**：市西部に広がる山岳部。市の西側には市名の元となった「南アルプス」、いわゆる赤石山脈が南北に走り、日本第2位の高峰である北岳（3,193m）をはじめ、間ノ岳（3,189m）、仙丈ヶ岳（3,033m）など3,000m級の山々が嶺を連ねている。日本列島を南北に貫く糸魚川－静岡構造線を間にはさんで、その東側には櫛形山、丸山など標高2,000m級の山々がそびえる巨摩山地が南北に展開する。こうした「山方」の森林面積は193.4k㎡と広大で、市面積の約73%を占める。
- ② **根方**：山岳部の東麓に位置する台地や高位段丘地域およびその崖下に展開する扇状地扇頂部。さらに市ノ瀬台地では台地上を「坂上」、台地下を「坂下」と呼ぶ。
- ③ **原方**：「山方」「根方」のおおむね東側に位置し、山岳部を水源として東へと流下する御勅使川や深沢川、市ノ瀬川など諸河川が造り出す扇状地の扇央から扇端部。多くの集落がこの扇状地上に立地する。
- ④ **田方**：市東側を南流する釜無川が御勅使川扇状地を浸食して造りだした氾濫原。伏流水が湧出するため、古くから水田耕作が主体。

(イ) 御勅使川

- ① 巨摩山地ドノコヤ峠の東麓が源流。全長約18.8km。
- ② 河川勾配が平均2.8%の急流河川。
- ③ 流域の地質が第三紀御坂層。一部に泥岩が含まれるため脆弱。風雨に浸食されやすい→下流に大量の土砂を供給。
- ④ 古くから洪水を起こす暴れ川として有名。御勅使川の語源は洪水を意味する「水出川」と言われ、近世の文書でも「みて(で)いがわ」の文字が見られる。

また天長2年(825)の大洪水のため、甲斐国司の要請により朝廷からの勅使が下向したことが由来との説もある。

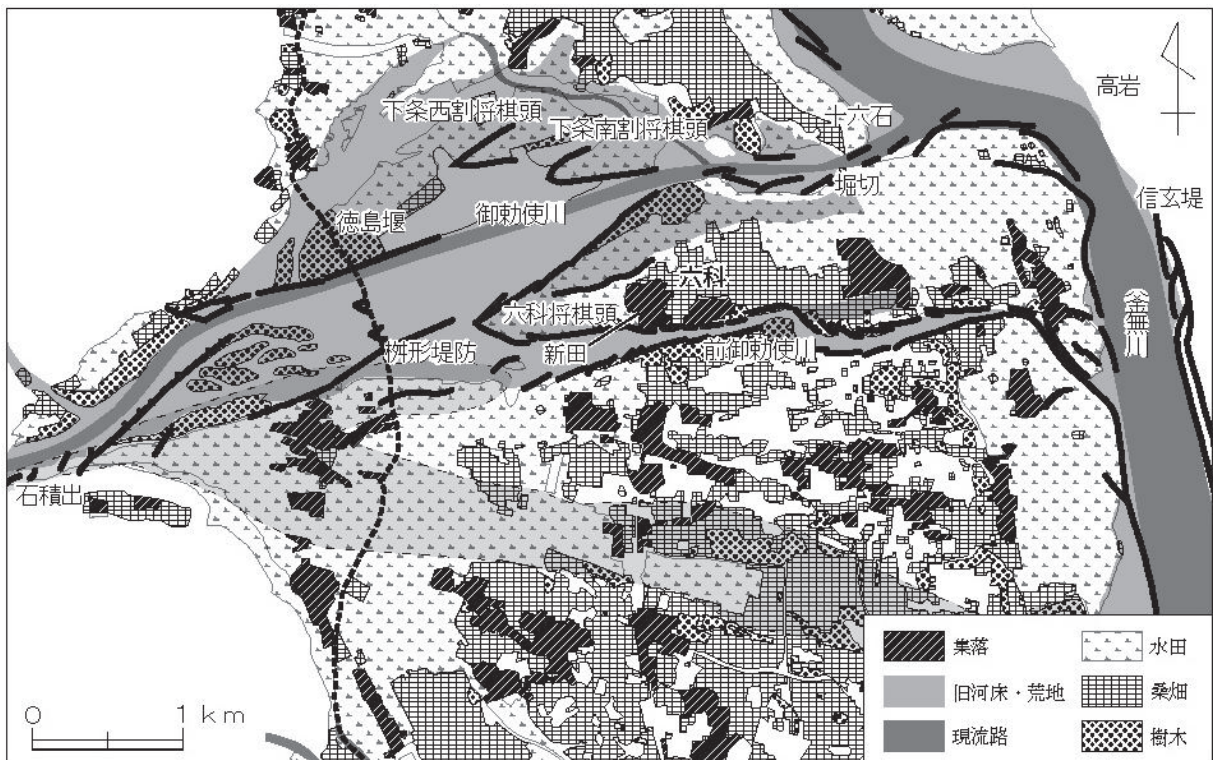
(ウ) 御勅使川扇状地

- ① 東西約 7.5km、南北約 10km。面積 37.64k m²。
- ② 御勅使川による土石流により形成。
- ③ 砂礫が主体の土壌のため、常習旱魃地域。

2. 御勅使川の治水遺構

(ア) 甲斐国志にみる信玄伝承の治水政策

「武田信玄ノ時ニ至リ、大ニ水役ヲ興シ、下条南割村ニテ岩ヲ鑿鑿スルコト広十八歩、上流駒場・有野ニ石積出ヲ置キ、駿流ヲ激シテ斜ニ東北ヘ向ハシム、対岸ハ竜王村ノ赤岩ナリ 一名高岩、又六科村西ニ圭角ノ堤ヲ築キ、流ヲ兩派ニシテ以テ水勢ヲ分ツ、是ヲ将棋頭ト云、其突流シテ釜無河ニ会スル所ニ、大石ヲ並置テ水勢ヲ殺グ、釜無河ノ水ト共ニ順流シテ南方ニ趣カシム、於是暴流頓ニ止ミ、竜王村ノ堤ヲ築テ、村里ヲ復スルコトヲ得タリト云」(卷之三十一 山川部第十二 巨麻郡西郡筋)



御勅使川・釜無川治水・利水遺構位置図 (1/50,000)

(イ) 石積出

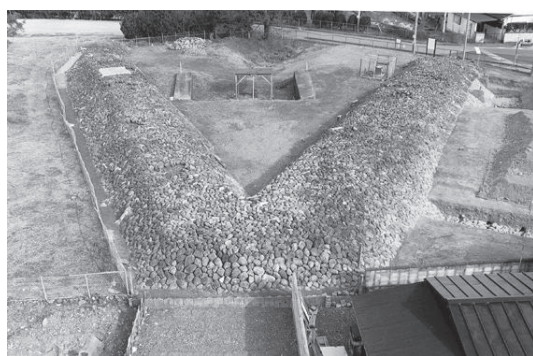
- ① 有野の水田や集落さらに御勅使川扇状地に立地する村々を守る役割。一番から五番までの堤防が現存する (一～三番堤は将棋頭とともに国指定史跡)。
- ② 有野村水下 21ヶ村に人夫動員 【承応3年(1654)江戸幕府奉行連署状】

1. 有野、百々、上八田、六科、榎原、上高砂、下高砂、徳永、築山、飯野、在家塚、西野、上今諏訪、下今諏訪、上今井、下今井、曲輪田、桃園、吉田、寺部、小笠原、十日市場
 2. 19世紀には治水について各村の負担が増大、御勅使川が北に固定化したことから下流の村々の一部が動員に応じない事例が見られる。
- ③ 四番堤の発掘調査：堤防の基礎は丸太を梯子状に組んで堤体の沈下を防ぐ梯子土台が設けられ、川表側には80cm前後の石を用いた石積みが施されコンクリートで固定されていた。根固めには三番堤と同様に木工沈床が用いられ、そのさらに川表側には、鉄線蛇籠が縦に並べられている構造で、明治時代末から大正時代に施工されたものと推測されている。



(ウ) 柵形堤防

- ① 徳島堰から六科村へ取水する水門を守る堤防。徳島堰が暗渠化された18世紀初頭には築堤されていた可能性。
- ② 発掘調査では、川表側基底部から3列の「木工沈床」検出。現状の遺構が、明治40年以降修築されたものであることが明らかとなっている。



(エ) 六科将棋頭

- ① 将棋頭下流の耕地や村落を守る役割。将棋頭内には徳島堰から導水した水で作られた六科村の水田が広がっている。

- ② 将棋頭六科一番堤・二番堤発掘調査：堤防基底部に「梯子土台」を転用した根固めが検出された。旧御影村田之岡村の行政文書の設計書との検討から、現状の遺構が明治32年に改築されたものであることが、明らかにされている。

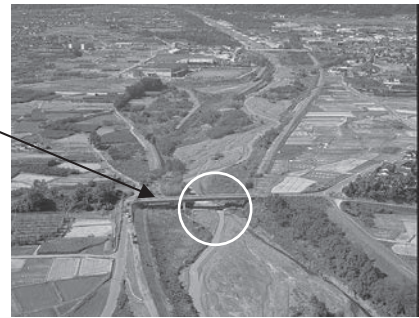


(オ) 下条西割将棋頭・下条南割将棋頭

- ① どちらも御勅使川の流路内に耕地を確保するために築かれたいわゆる「尻無し堤防」。徳島堰から取水された水で灌漑された耕地を守る役割。
- ② 発掘調査の結果、川表側に小段を設け、敷12m、天端5m、高さ3mを測る。堤防は自然堆積層の上に土を盛り、裏込めをせずに石を置く工法で造られており、基底には木工沈床などの根固めは施されておらず、六科将棋頭と比較すると脆弱な構造。

(カ) 堀切

- ① 竜岡台地南端幅約33mを測る開削された現行の御勅使川流路。
- ② 武田信玄による開削説。
- ③ 御勅使川による自然開削説。

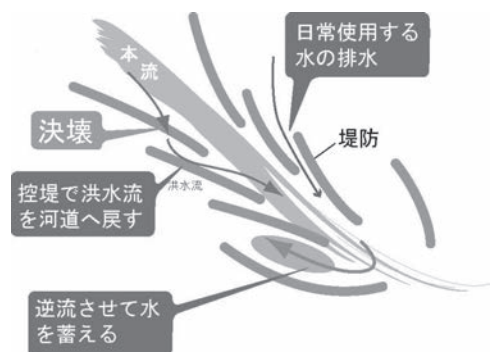


3. 治水の技術

(ア) 霞堤

- ① 不連続な堤防で主に急流河川に敷設された。下流への導水や上流の堤防が決壊した場合、その洪水流を下流の控堤が防ぎ、再び河道へ戻す役割があった。場所によっては一時的に水を蓄える機能も果たしていた。

【事例】：御勅使川堀切付近



(イ)川除林（水害防備林）

- ① 堤防に沿って植えられた樹林帯。水の侵食から河岸を守るとともに、川が氾濫しても被害を軽減する役割を果たしていた。水防資材（牛や木流しなど）の供給源でもあった。

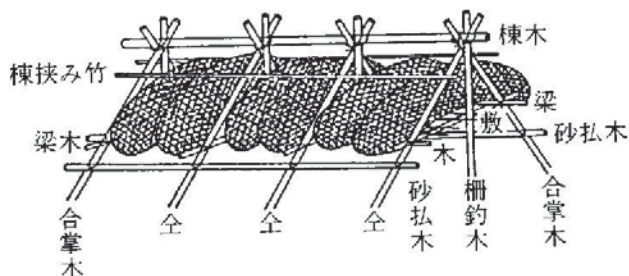
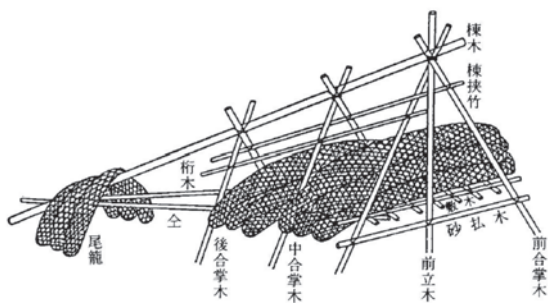
【事例】：信玄堤の水害防備林（写真は現在）

貞享5年（1688）の「御本丸様書上」とその添付図と考えられている信玄堤絵図（文政12年（1829）写し）を見ると、堤の本土手に長さ350間で竹が植えられ、本土手に添うように長さ450間の石積出が敷設され、その下流には長さ700間の石積堤が伸び、その内外は松や柳の林となっていた。植生は異なるが、現在でもその樹林帯は維持されている。



(ウ)牛・枠と蛇籠

- ① 牛・枠：木材を利用して作られた水制のひとつ。さまざまな種類の牛や枠がある。甲州における治水技術の最大の特徴でもある。
- ② 蛇籠：竹などで編んだ籠の中に石を詰めたもの。中世から利用されていたが、特に近世では堤体の保護としての「堅籠」や根固めとしての「根籠」、牛を固定するおもりとして大量に作られ消費された。竹蛇籠は昭和40年代までは主な治水技術の一つであった。



大聖牛（左）、棚牛（右）（『地方凡例録』）



発掘調査で発見された竹蛇籠：

前御勅使川堤防址群農道支線 A 地点 根籠（左）、前御勅使川堤防址群お熊野堤 豎籠（右）

4. 扇状地の利水 徳島堰

(ア) 概要

- ① 寛文年間に江戸深川の徳島兵左衛門によって計画された菰崎市上円井から南アルプス市の曲輪田新田まで約 17km を結ぶ灌漑水路。寛文 5 年（1665）に着工され、2 年後の寛文 7 年には曲輪田の大輪沢まで約 17km の通水に成功したと言われる。しかし、その年 2 回の大雨により堰がほぼ埋まり、兵左衛門はこれまでの工事費等の保証金と引き替えに江戸へ帰り、事業は甲府藩が引き継ぐこととなる。甲府城代戸田周防守は堰の復旧工事を家臣の津田伝右衛門と有野の矢崎又右衛門に命じ、寛文 10 年に工事を完成させた。寛文 11 年、「徳島堰」と命名される。



(イ) 影響

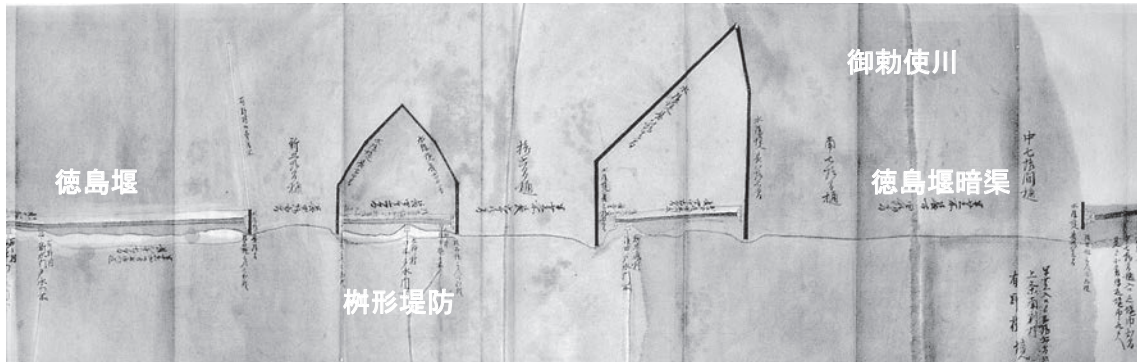
- ① 18 世紀初頭 約 160 ヘクタールの水田が開かれる。
- ② 水掛 22 ヶ村
 1. 【上郷】入戸野、折井、青木、樋口、武田、北宮地、鍋山、上条北割、上条中割、上条南割、下条西割、下条中割、若尾、下条南割
 2. 【下郷】六科、野牛島、有野、飯野新田、曲輪田、飯野、百々、在家塚
- ③ 六科新田や飯野新田、曲輪田新田など新たな集落が形成される。

(ウ) 御勅使川の横断工法の変遷

- ① 徳島堰開削当時：「板関」と呼ばれる工法。溝を掘り、下流側に一間四方の板

320 枚を牛枠で支える工法。

- ② 18C 初頭：木樋による埋樋による暗渠化（宝永 3 年（1706）の「徳島堰水門掛樋埋樋調へ」（『徳島堰』））。
- ③ 近世末：堰幅 2 間、両側高さ 4 尺の石垣を設置。その上に 2 間半末口 5 寸の丸太を間口 9 本並べて、上を砂礫で覆う。



徳島堰大口上円井村地内より流末曲輪田新田まで麓絵図 慶応 4 年部分（山梨県立博物館蔵）

- ④ 明治後期から大正：コンクリートを利用した粗石拱形眼鏡工法。
- ⑤ 昭和 47 年：昭和 38 年から国営事業として実施される釜無川右岸土地改良事業。主要工事の概要の一覧表には御勅使川暗渠の項目に延長 860.06m、構造に「コンクリート巻立馬蹄型」とある。



御勅使川暗渠工事写真（関東農政局 1974『釜無川』より）

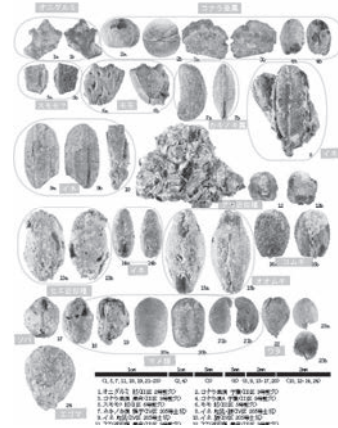
粗石拱形眼鏡工法で造られた石積みの暗渠にコンクリートの巻立工事が実施されている。

5. 原七郷（上八田・在家塚・西野・上今井・桃園・吉田・小笠原）周辺の扇状地の文化

(ア) 常習旱魃地帯「原七郷はお月夜でも焼ける」、「西郡の焼っぱた」

(イ) 遺跡から発見された食物

- ① 扇状地の北部の野牛島・西ノ久保遺跡では奈良・平安時代の住居跡からイネの他、ムギやアワ、ヒエ、マメ類などの雑穀やエゴマ、モモヤスモモの核などの種や核が発見された（右写真）。炭化した種子や実の数を遺跡と時代ごとに比較した研究によれば、扇状地では10世紀ごろを境にイネからアワやヒエなどの雑穀の数が増える傾向（櫛原 2009）。



(ウ) 近世の生産物

- ① 粟（アワ）や稗（ヒエ）、麦、蕎麦などの雑穀や渋柿、桐薪、牛蒡、大根、冬葱、人参、煙草などを栽培した畑作中心。

(エ) 近世の行商

- ① 木綿や煙草、柿などの商品作物の生産。村外へ行商。畑作を中心とした村の生産力以上の人口を支えられた要因（溝口 2002）。

『文政十一年（1828） 上八田村諸事明細帳写』

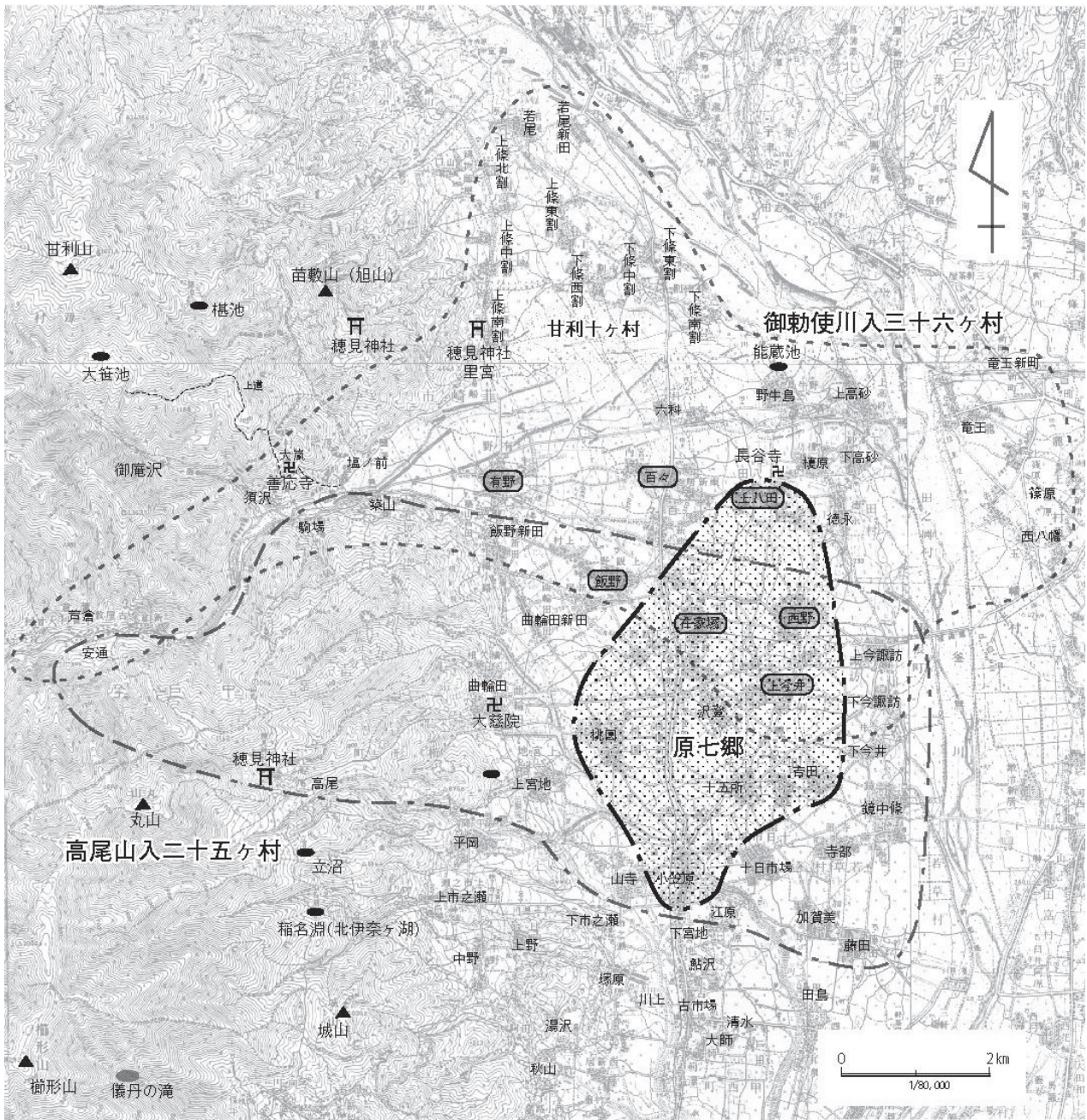
「耕作之間二者男ハ煙草売、其外小商ひニ在町不限罷出申候 さらし柿之義ハ原七郷九ヶ村ニ限り、國中野売・町在売ニ往古ヨリ仕来リニ御座候」

(オ) 溜池

- ① 御勅使川の四カ坊堰（有野、築山、飯野、飯野新田）や徳島堰から導水。飲料水、生活用水、農業用水。「水わけ石」が重要。上八田や西野で多く見られる。原七郷全域で200箇所以上（『中巨摩郡誌』）。
- ② 百々遺跡で中世の溜池状遺構が検出されている。

(カ) 雨乞い



- ① 神社：集落の氏神、信州諏訪神社
- ② 寺社：榎原長谷寺（十一面観音に祈祷、おびんずるさんを縄で縛って引きずるなど）、大嵐善応寺（千手観音）、曲輪田大慈院（雨乞不動：西郡28ヶ村で崇拜。昔は神輿が村中をねり歩く。昭和初期以後、神座に酒樽を据えてねり歩く。ねり歩きには仏像へイヤガラセをした。）、中野法久寺（薬師如来を川へ投げ込んでいじめる）、芦安車地藏
- ③ 池・泉：野牛島の能蔵池、上今井の七つ池、大嵐の大笹池、櫛形山儀丹の滝、北岳山麓白根御池
- ④ 事例：【飯野村中村】氏神で行われ、藁で大きな竜を作って村中を練り歩き、田の畦で太鼓や鐘を叩き、念仏を唱えたりした。氏神に竜の吹流しを立て、大笹池にお水を貰いに行き、遠くは諏訪明神までお水を貰いに行った。



(明治43年測量昭和32年修正 昭和32年発行「韭崎・御嶽仙峽・甲府・齋沢」1/50,000地形図使用)

- 御勅使川入三十六ヶ村
- 高尾山入二十五ヶ村
- 原七郷

※各種線は入会や原七郷の領域ではなく、所属する村々の広がり示すための仮想線である

-  大笹池での雨乞いの記録が残る村
-  池・沼

大笹池での雨乞いの記録が残る集落と入会の関係

- ⑤ 雨乞い場所となる山・山中の池は各集落の入会が関係。大笹池は御勅使川入三十六ヶ村の村々が行く場所。櫛形山は高尾山入会二十五ヶ村の集落が利用。

⑥ 雨乞いの一般的パターン：集落内の神社→長谷寺→山中の池→信州諏訪神社

6. 新田開発と山方 草肥の獲得



八田山長谷寺（榎原）と雨乞いのおびんずる像

大嵐大池笹池

(ア) 17世紀中後半からの新田開発→石高・人口の増加

(イ) 「山方」資源

- ① 新田・畑維持のための草肥や馬肥の獲得。田畑維持のためにはその面積の10倍以上の山野が必要（水本 2003）。その他に木材や燃木、薪、炭、落葉など里の集落にとっても山方は必要不可欠な資源の供給地。

(ウ) 御勅使川入三十六ヶ村

- ① 武川筋：須沢、大嵐、塩之前、上条南之割、上条中之割、上条北割、上条東之割、下条東割、下条南割、下条中割、下条西割、若尾、若尾新田、芦倉
- ② 西郡筋：安通、駒場、築山、有野、飯野、百々、六科、野牛島、上高砂、下高砂、榎原、徳永、上八田、上今井、在家塚、上今諏訪、下今諏訪、西野
- ③ 北山筋：竜王、竜王新田、西八幡、篠原

(エ) 高尾山入二十五ヶ村

- ① 長嶺口：駒場、築山、飯野、在家塚、西野、上今井、下今井、上今諏訪、下今諏訪、西八幡、篠原
- ② 中峰口：曲輪田、桃園、吉田、鏡中条
- ③ 青野口：上宮地、山寺、小笠原、加賀美、江原、藤田、十日市場、寺部
- ④ その他：安通、高尾

(オ) 焼畑の開発

(カ) 草山化と土砂の流失

- ① 緑肥→草山が必要。高木の伐採による草山化。
- ② 焼畑による開発。
- ③ ①②により土砂の流失→洪水被害の拡大→堤防の大規模化→土砂堆積による天井川化。

7. 水にかかわる民話・伝承

- (ア)山方：「夜叉神のたたり」大洪水と山の神でもある夜叉神へ水防祈願。
- (イ)根方：「下条婆々」大笹池から千住観音を善応寺へ運ぶ。強清水など。
- (ウ)原方：「信玄野売り免許状」原七郷の柿の野売りは、武田信玄が許可したもので「野売り免許状」（後世作か）が残されている。
- (エ)田方：「弘法水」弘法大師が独鈷を地面につくと、水が湧出。

おわりに

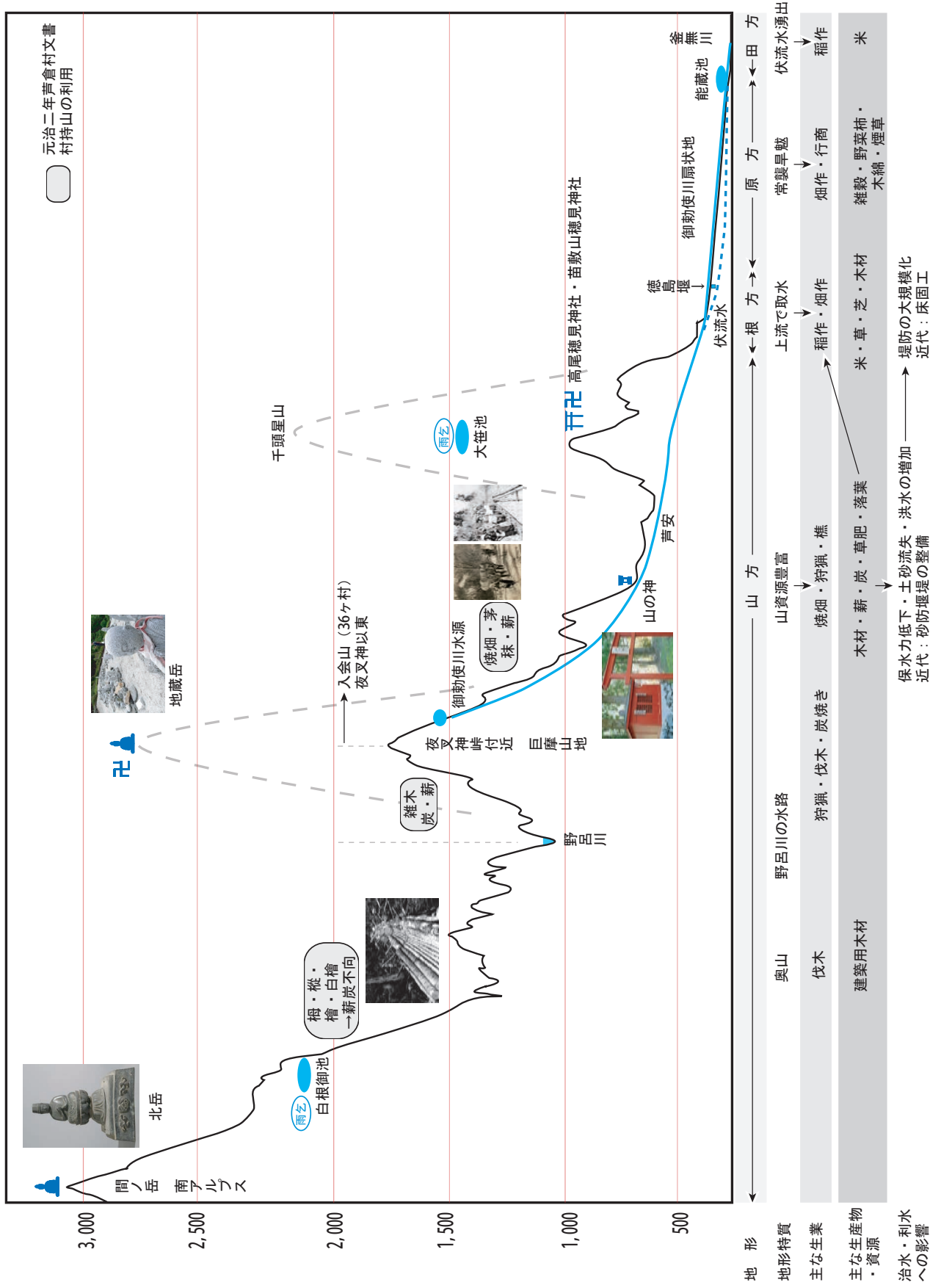
南アルプスには、古くから「山」とそこから生まれる「水」と共に生きてきた人々の歴史がある。その人々の歴史をひもとき、この場所で培われた文化を再考することは、「水の世紀」を生きてゆく現代の私たちにとって、貴重なみちしるべとなるはずである。

引用・参考文献

- 芦安村 1994 『芦安村誌』
- 今福利恵 2004 「第6章 調査成果」『百々遺跡3・5』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第213集山梨県教育委員会
- 関東農政局 1974 『国営釜無川農業水利事業写真集』公共事業通信社
- 榎形町誌編集委員会 1969 『榎形町誌』 榎形町
- 榎原功一 2009 「第5章第11節 種実分析」『野牛島・西ノ久保遺跡Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ』 南アルプス市教育委員会他
- 三枝善衛編 1959 『徳島堰』 徳島堰組合
- 佐藤八郎校訂 1968 『甲斐国志』 雄山閣
- 白根町誌編集委員会 1969 『白根町誌』 白根町
- 信玄堤の再評価実行委員会 2004 『信玄堤の再評価』資料集
- 第7回東日本埋蔵文化財研究会 1998 『治水・利水遺跡を考える』
- 高木勇夫・中山正民 1987 「微地形分析よりみた甲府盆地における扇状地の形成過程」『東北地理』39
- 畑 大介 1988 「武田信玄・治水の構想」『戦国武将武田信玄』
- 八田村誌編集委員会 1972 『八田村誌』 八田村
- 水本邦彦 2003 『草山の語る近世』 山川出版社
- 溝口常俊 2002 『日本近世・近代の畑作地域史研究』 名古屋大学出版会
- 山下孝・斎藤秀樹「御勅使川『堀切』成立史の検討」『帝京大学文化財研究所報』
- 山梨県 2006 『山梨県史 通史編3 近世1』
- 山梨県史編さん専門委員会民俗部会 『在家塚の民俗—中巨摩郡白根町—』山梨県民俗調査報告書第三集
- 山梨県立博物館 2010 『信玄堤研究の新展開—甲斐の治水・利水と景観の変化—』調査・研究報告4
- 2013 『水の国やまなし—信玄堤と甲斐の人々—』

南アルプス山麓の地形と文化

※標高は1.4倍



南アルプスの特異な植生

山梨県植物研究会会長 大久保 栄 治

はじめに

富士山・南アルプスの景観や植生を比較すると！

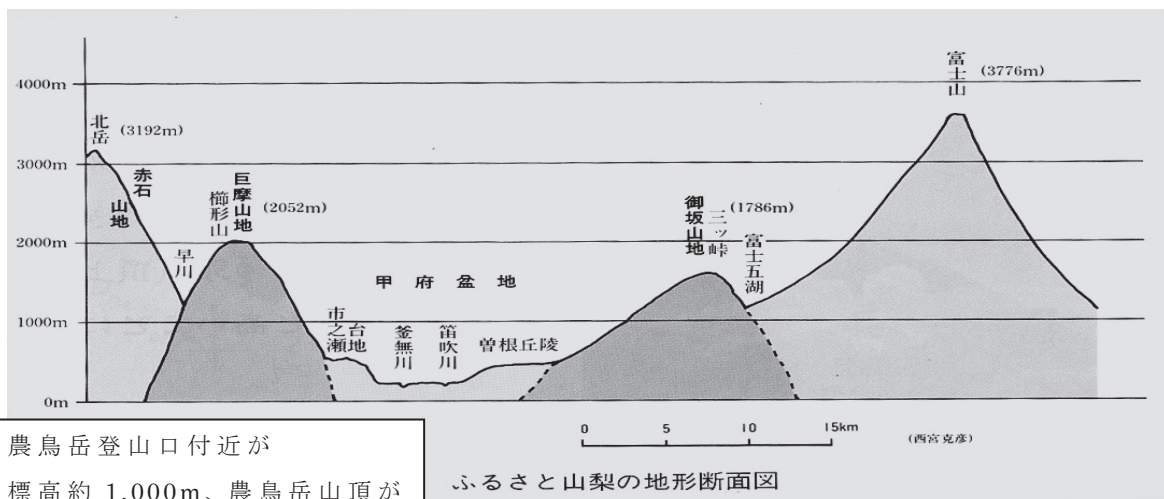
富士山・・・どこから見ても、四季を通してその景観は素晴らしい。また、火山が作った溶岩洞穴や溶岩樹型。また湧水地や湿地が数多くある。植物の観点から見ると、

- ① 垂直分布（標高差による植生）は明瞭であり、山麓には青木ヶ原樹海のような広大な原生林（自然林）が成立する。一方、山麓の人々は、自然と共に生きてきた。自然と人との共生によって、現在も維持されている植物も数多くある。
- ② 山麓には、フォッサ・マグナ要素が多く集中する。また、襲速紀（そはやき）要素の植物も生育する。
- ③ 高山帯は植物の種類は少なく、火山荒原に生育する先駆植物が優占する。また、新しい火山に分布する特殊な植物もある。

南アルプス・・・富士山とは違った景観とその美しさがある。特に高山にはその特徴が見られる。植物の観点から見ると、

- ① 奥深い山岳で、富士山よりも人からの影響力は少なく、昔からの自然が各地に残されている。
- ② 山岳は、地形、地質、気象が変化に富んでいる。それだけに、その環境に適応した植物があり、多様な植物種や植物群落が成立する。
- ③ 南アルプスの山岳は、氷河期には陸上に現れていたため、高山植物（氷河期の遺存植物）が多くある。
- ④ 日本固有種、南アルプス固有種、日本列島の限られた地域に生育する植物が数多くあり、特に高山帯に多い。

1 南アルプス（北岳を中心に）の地形



2 気 象

「野呂川水域学術調査報告」によると、県野呂川企業局発電所の観測記録では、年平均降水量 2,000～2,300 mm。北岳では 3,000 mm を越えると推定され、南アルプス流域は多雨地域である。

* 気象庁 1971～2000 年の年降水量 甲府 1,109 mm、全国は 1,300～1,500 mm

3 植物の垂直分布（北岳周辺）

標高によって植相が変わることを「植物の垂直分布」という。南アルプスでは、900-1000 m 上部の樹林帯は落葉広葉樹林が占め、**山地帯**と呼ばれている。1700-1800 m 付近から常緑針葉樹の林に変わり、**亜高山帯**である。2700 m 上部では、背の高い林は形成されず森林限界に達する。**高山帯**である。

(1) 山地帯（標高 900・1000～1700-1800 m）

野呂川林道沿い地域で、ミズナラ、カエデ類、サワグルミなどの落葉広葉樹が多い。急な崖には、ツガ（コメツガ）・ウラジロモミの常緑針葉樹も生育する。山地帯の極相林はブナであるが、富士山麓のように大きな群落はなく単木で存在する。

この流域は甲府盆地の山地に生育する植物が見られるが、崩壊地や河川敷には、フォッサ・マグナ要素と言われているフジアザミやシナノナデシコが見られるのは特徴的である。

貴重な群落としては、広河原のカツラ林、鳳凰山の山麓甘利山のレンゲツツジ群落などがある。

(2) 亜高山帯（標高 1700-1800～2700 m）

亜高山帯の極相林はシラビソ・オオシラビソ・コメツガであるが、南アルプスはこれらの樹林が広く占めている。ところにより、カラマツも生育する。亜高山帯の雪崩や倒木跡地は高茎草本群落こうけいそうほんぐんらくが見られ、その周囲にはダケカンバが生育する。

シラビソ林下はコケで被われているところが多く、親木のシラビソやオオシラビソの稚樹が数多く見られる。その他、ゴゼンタチバナやツバメオモト、林縁にはハクサンシャクナゲが生育する。

海拔 2,200 m 付近の大樺沢二俣から八本歯コルへの登山道や右俣コース、小太郎尾根分岐の登山道沿いは高茎草本群落地で、多種多様な植物が見られる。その中でも、分布上貴重な植物も数多くある。

キタザワブシ、ヒメゴヨウイチゴ、ホソバハナウド、ミヤマハナシノブ、セリバシオガマ、オオヒョウタンボク、タカネヨモギ、センジョウアザミ、ヤツガタケタンポポなどは、日本列島の限られた地域に分布する日本固有種である。近年、シカやサルなどの食害が目立ち心配である。

(3) 高山帯（標高 2700 m 以上）

日本では、森林限界以上を高山帯と呼び、山梨県内では、およそ標高 2,700 m 以上である。

富士山を除き、ハイマツが優占する。

南アルプスの高山帯、特に北岳は特殊な植物が数多く見られる。



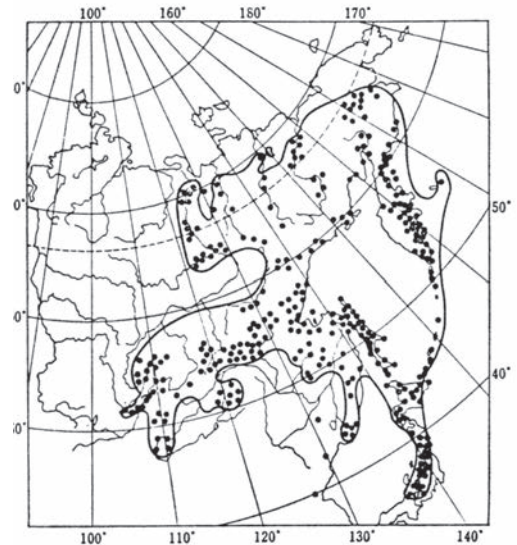
絨毯状生育するハイマツ

参 考

右図は現在のハイマツの分布図である。東北アジアから日本、日本列島では高山にのみ生育することから、ハイマツは氷河期に北方から南下し、日本列島に定着していたが、間氷期になり気温が上昇し、気温の低い高山にだけに生き残ったと考えられている。

ハイマツを例にとったが、高山植物は氷河期時代と深い関係があると思われる。高山植物の中には、氷河期時代と形態を変えずに残ったものもあれば、日本の高山の環境に適応するように僅かずつ形態を変えていったものもある。それが固有種であろう。

富士山は氷河期以降の山であるので、南アルプスや八ヶ岳、秩父山地とは大きく違う。



4 日本列島で見られる高山植物（高山の環境により高山植物が違う）

風衝地（季節風がまともにあたる西斜面）

ハイマツ、チシマギキョウ、コケモモ、キバナシャクナゲ、ミヤマオダマキ、ミヤマダイコンソウ、イワヒゲ、ハクサンイチゲなどが生育する。

風当たり少ないところ（稜線の東側の岩場や、土砂が堆積し雪が遅くまで残るところ）

ツガザクラ、アオノツガザクラ、タカネナデシコ、また雪が遅くまで残るところでは、チングルマ、クロユリ（亜高山帯～高山帯）、ウサギギク、コイワカガミ、タカネヤハズハハコなど。

5 南アルプスの高山帯には注目すべき植物が数多くある

(1) 限られた地域に分布する日本固有種

タカネピランジ *Silene keiskei* var. *akaisialpina* ナデシコ科

分布は南アルプス。低山系日本固有要素。茎の高さ 10～20 cm、花の径は 3～4 cm、花柄や萼に開出した腺毛が多い。鳳凰山の花崗岩の岩場や砂礫地の高山に多く生育するが、北岳に生育するものはタイプがことなる。鳳凰山は茎や花柄が細く、花は濃紅紫色である。北岳の岩場に生えているものは、茎や花柄がしっかりとしており、花は淡紅紫色または白色である。白花品をシロバナタカネピランジ f. *leucantha* という。

キタダケトリカブト *Aconitum kitadakense* キンポウゲ科

分布は南アルプス北岳。低山系日本固有要素。トリカブト属の分類は非常に難しいが、本種は葉が細かく切れ込み、花柄に屈毛が多くあるのが特徴である。

キタダケソウ *Callianthemum hondoense* キンポウゲ科

分布は南アルプス北岳。東アジア系日本固有要素。キタダケソウ属はアポイ山のヒダカソウ、サハリンのカラフトミヤマイチゲ、北朝鮮のウメザキサバノオがある。北朝鮮のウメザキサバノオを除き、石灰岩地に生育する。キタダケソウは、花が白色で径 2 cm 前後、萼片 5 枚、花弁 6～7 枚。6月中旬から7月上旬に開花する。

キタダケキンポウゲ *Callianthemum hondoense* キンポウゲ科

分布は南アルプス北岳・間ノ岳。ヒマラヤ系日本固有要素。茎葉は 3 全裂する。花は黄色で単生、径 1.5 cm 前後。

キタダケナズナ 別名ハクホウナズナ *Draba kitadakensis* アブラナ科

分布は南アルプス北岳、八ヶ岳。日本固有要素。高山に生育するこの仲間は、クモマ

ナズナ、シロウマナズナがある。本種は葉・茎に星状毛が密生する。シロウマナズナは、葉は無毛で縁にだけ長毛がある。クモマナズナは葉に星状毛はあるが、葉の縁の鋸歯が深いので区別がつく。

サンブクリンドウ *Comastoma pulmonarium* ssp. *sectum* リンドウ科

分布は南アルプス、八ヶ岳。東アジア系日本固有要素。茎の高さは5～20 cm、生育地によって草丈はことなる。開花は8月下旬。花冠は5裂、淡紫色。南アルプスの三伏峠で最初に発見されたことからこの名前が付いた。

アカイシリンドウ *Gentiana yabei* var. *furusei* リンドウ科

分布は南アルプス、加賀白山。中央アジア系日本固有要素。写真では大きく写されているが、実際に現地の岩場に生えているものは非常に小さく、高さは10 cm以下である。花冠の長さは2 cmくらいで4裂、淡紫色。南アルプスの生育地は、仙丈岳・北岳・荒川岳・赤石岳・千枚岳の記録がある。

キタダケヨモギ *Artemisia kitadakensis* キク科

分布は南アルプス。記録では南アルプスの生育地は仙丈岳・北岳・荒川岳・赤石岳・千枚岳。北アジア系日本固有要素。全体に銀白色の絹毛が多くある。葉身は掌状に細かく裂ける。頭花は総状につき、径5～8 mm。観賞用として市販されているアサギリソウがあるが非常によく似ている。アサギリソウは北陸や東北地方・北海道・千島・カラフトに分布し、有花茎が分岐し、頭花は円錐状につき3～4 mmと小さい。

キタダケイチゴツナギ *Poa glauca* var. *kitadakensis* イネ科

分布は南アルプス。周北極系日本固有要素。稈は40～70 cm。小穂の長さは6 mm前後、小花は3個で包穎の先は芒状に尖る（写真 31）。母種のタカネタチイチゴツナギ *Poa glauca* もトラバース道にあるが、小穂の長さは3 mm前後と小さく、包穎の先は芒状にならない。

キタダケカニツリ *Trisetum spicatum* var. *kitadakensis* イネ科

分布は南アルプス。汎世界系日本固有要素。葉鞘^{ようしやう}や稈の毛は少なく、稈はやや細い。稜線の岩場に生育する。母種のリシリカニツリ *Trisetum spicatum* も白峰三山に生育するが、東斜面に多く、葉鞘^{ようしやう}や稈の毛が密であり、稈がやや太い。両種の区別ができないものもある。

ミヤマカニツリ *Trisetum koidzumianum* イネ科

分布は南アルプス、北アルプス（白馬岳・槍ヶ岳）。日本固有要素。記録では南アルプスでは仙丈岳・間ノ岳・荒川岳・赤石岳。小穂の長さ5～6 mm、2～3小花からなり、帯黄色、ときに紅紫色なる。

その他、分布上注目すべき高山の日本固有種については、次のものがあげられる。

シロウマナズナ *Draba shiroumana* 分布は南アルプス、北アルプス。**ミヤマムラサキ *Eritrichium nipponicum*** 分布は南アルプス、北アルプス、妙高戸隠山、美ヶ原。**タカネヒゴタイ *Saussurea triptera* var. *minor*** は亜高山帯に生育するヤハズヒゴタイの高山タイプであるが、中部地方の太平洋岸。

(2) 大陸の寒冷地や日本列島の一部の地域に生育する植物

タカネシダ *Polystichum lachenense* オシダ科

「日本のシダ植物図鑑 No. 1 倉田・中池」では、日本の分布は南アルプス。大陸では台湾、中国、ヒマラヤ、アリューシャンに分布する中国・ヒマラヤ要素。葉の長さは20 cm以下で、単羽状複生～2回羽状複生。包膜は円形。生育地の多くは、稜線東側の石灰岩の岩場の隙間や砂礫地である。

ヒイラギデンダ 別名ヒイラギシダ *Polystichum lonchitis*

日本の分布は南アルプスの北岳。大陸ではカムチャツカ、大陸では北千島、サハリン、ヒマラヤに分布する周北極要素。葉の長さは 20 cm 以下で単羽状複生、小葉は硬く縁に芒状の鋸歯がある。包膜は円形。

タカネマンテマ *Silene wahlenbergella* (写真 15)

日本の分布は南アルプス。大陸では北欧・北米大陸、シベリアに分布する周北極要素。記録では南アルプスの生育地は、仙丈岳・北岳・農鳥岳・塩見岳・千枚岳・荒川岳に生育する。萼の長さ 1 cm ほど、白色の地に 10 本の黒い筋が入り、長い萼の中から小さな淡紅色の花弁が突き出る形の変った花である。

ヒメセンブリ *Lomatogonium carinthiacum*

分布は南アルプス、八ヶ岳。大陸ではカムチャツカ、シベリア、ヒマラヤ、コーカサス、欧州東部に分布するアジア・ヨーロッパ型周北極要素。記録では南アルプスの生育地は、北岳・荒川岳・千枚岳に生育する。茎の高さは 10 cm 前後。花冠は淡紫青色で深く 5 裂、離弁花に見える。花期は 8 月下旬～9 月上旬。

ハハコヨモギ *Artemisia glomerata* キク科

日本の分布は南アルプス（北岳）、木曾駒ヶ岳。大陸ではアラスカ、カムチャツカ、東北シベリア、千島、サハリンに分布する北太平洋要素。全体に白色の絹毛が多くある。葉身は掌状に細かく裂ける。頭花は散房状に密につき、径 5～7 mm。生育地の多くは稜線上の砂礫地である。

ヒゲナガコメススキ *Ptilagrostis mongholica* イネ科

分布は南アルプスの北岳、白馬岳。大陸では朝鮮北部、中国、東シベリア、モンゴル、アルタイに分布するアジア要素。稈は 20～30 cm。小花は 5 mm ほどで芒が長く突き出るのが特徴である。花期は 8 月下旬～9 月上旬。

高山植物図鑑（Ⅱ）清水建美著 保育社 1992 年によれば、高山帯の維管束植物（シダ・種子植物）を、現在の地理的な分布域から 6 群に分けている。A 汎世界要素、B 周北極要素、C アジア要素、D 太平洋要素、E 低山要素、F 純日本固有要素。

例えば、ムカゴユキノシタは周北極要素の分類群にあたり、現在日本では本州の白馬岳・八ヶ岳・南アルプスに生育しているが、当該種または近縁種が北極周辺に分布するという意味である。

参考文献

加藤雅啓・海老原淳（2011） 国立科学博物館叢書⑩ 日本の固有種 東海大学出版社
佐竹義輔、大井次三郎・亘理俊次・北村四郎・富成忠夫（1982）

日本の野生植物 草本Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ 平凡社

清水建美（1992） 原色新日本高山植物図鑑Ⅰ・Ⅱ 保育社

大久保栄治・中込司郎（1991） 山梨植物研究 4 山梨県植物研究会

南アルプスの山岳環境の保全

環境省南アルプス自然保護官事務所 中 村 仁

1. 南アルプス国立公園の概要

南アルプス国立公園は昭和 39 年 6 月 1 日に 23 番目の国立公園として指定された比較的新しい国立公園で、平成 26 年には指定から 50 周年を迎えます。

面積は 35,752ha で、山梨県、長野県、静岡県の 3 県にまたがり、東西約 15km、南北約 50km に及ぶ、南北に長い国立公園です。日本第二の高峰北岳(3,193m)をはじめ、3,000m 級の高峰十座を有する、日本で有数の山岳公園です。

南アルプスは日本で氷河が存在した最も南の場所で、キタダケソウやチョウノスケソウなど、氷河とともに南下してきた植物の世界的な南限となっています。また、ライチョウ等の貴重な野生生物の生息地にもなっています。

年間の利用者は 60～80 万人ほどで、他の国立公園と比較してもそれほど多くはありませんが、奥深い山岳地をじっくり楽しめる魅力があり、登山愛好者には根強い人気があります。北部の北岳、甲斐駒ヶ岳、仙丈ヶ岳は南アルプスの中では比較的アプローチも短く、山小屋も整備されており、多くの方に利用されています。南部の聖岳、赤石岳、荒川岳等はアプローチが長く、登山者は相応の体力、装備が必要ですが、最近では、寝具、食事付きの小屋が整備されているため、多くの登山者に親しまれています。

2. シカによる影響とその対策

1990 年代末から、ニホンジカによる「お花畑」への影響が報告されるようになり、その後の 10 年間で急速に影響が拡大し、深刻化しており、最近では 3,000m の稜線付近にまでニホンジカが出没するようになっています。そのため、以前はお花畑だった場所が、シカの嫌いな植物ばかりになってしまったり、ひどいところでは植生がなくなり裸地化してしまった場所もあります。このようなニホンジカによる植物相及び植生への影響は全国各地で過去に例を見ない速度で進んでいます。

特に高山・亜高山帯の生態系を構成する植物は環境の変化に対して脆弱であり、さらに過去にシカの採食による影響をほとんど受けておらず、一度衰退するとその回復には長い年月を必要とします。また、植物相及び植生の衰退は、

高山・亜高山帯を生息場所とする動物の生息環境の劣化にもつながります。現在、ニホンジカによる不可逆的な影響を防止するために早急な対策が必要な段階にあります。

そこで、南アルプスに関わる関係機関では、平成20年度からシカ被害状況調査やそれを踏まえた検討会を開催し、平成23年3月31日に「南アルプス国立公園ニホンジカ対策方針」という計画が策定されました。この計画では、ニホンジカの影響が及ぶ以前（1980年代）の植生を目安として、生態系の維持又は回復を図ることを目的に掲げ、①生態系の状況把握、②ニホンジカの防除（個体数管理、防鹿柵）、③環境の改善、④生態系の維持回復に必要な動植物の保護増殖、⑤普及啓発という5つの対策を軸として実施していくことを定めています。

現在実施されている具体的な対策として、シカの個体数調整、防鹿柵の設置や維持管理、土壌流出防止マットの敷設、シカ移動経路・生息状況調査、生息密度把握指標調査、防鹿柵内の植生回復状況モニタリング、シカ侵入状況・植生衰退状況・モニタリング調査等があります。

特に根本的な対策としては、ニホンジカの生息数を減らすことが重要となっており、移動時期・越冬時期を中心に、各機関が南アルプス及びその周辺地域でシカの捕獲（個体数調整）を実施してきました。

しかし、昨年度までの調査結果から、対策を講じることができる場所は限られていることに加えて、ニホンジカは1,600m以上の標高の高い場所でも越冬することや、高山帯に出没しているニホンジカは、決まった越冬地があるわけではなく、複数の場所で越冬した個体が夏になると高山帯に集まってくるものが分かってきました。また越冬地には、人が容易に入ることができない場所も多く、個体数調整等の対策をとるのが困難な場所も明らかになってきました。

そこで、今年度から専門の事業者に委託して、高山帯に出没するニホンジカを直接捕獲することについて、試行的な取り組みを実施することとなりました。

ただニホンジカ対策には特効薬的な対策はなく、関係機関が連携して様々な対策を推進し、実施していくことが重要となります。

3. その他の環境保全の取り組み

南アルプスではニホンジカ対策以外にも、キタダケソウの保護対策や登山ルール・マナー向上のための普及啓発活動。関係10市町村が中心となって進めているユネスコ・エコパーク登録に向けた取り組みなど様々な環境保全に関する取り組みが行われています。

4. まとめ

広大な南アルプスの自然を守り、後世に引き継いでいくためには、南アルプスで起こっている問題について、みんなが自分の問題として考え、連携・協力しながら、一人一人ができる事を実践することが大切であると思います。

また自然環境の問題は、様々な要因が絡み合っていることから、その対策にも特効薬はなく、色々な手法を組み合わせ、順応的に取り組むことが重要となります。

南アルプスの動物相の特徴とその魅力

日本環境動物昆虫学会 北原正彦

南アルプス（赤石山脈）は、日本第2の高峰北岳を始めとし標高 3,000 m 以上の山岳を9つも擁す我が国を代表する褶曲山地の1つである。この古い歴史を持った山岳の生物相を特徴づける種群は、植物・動物を通じて何と云っても高山性の種群（氷河期の遺存種）であろう。この南アルプスの生物多様性を特徴づける高山性種群にはいったいどのような特性があるのだろうか。私は以下に述べる3つの点で大きな特徴があると考えている。

先ず第1番目は分布の固有性である。南アルプスの高山性種群には南アルプス固有種（世界中で南アルプスにだけ生息・生育する種）が多く見られる。これにはキタダケソウを始めとする多くの高山植物、動物群では全て昆虫類になるがオサムシ類、ハネカクシ類、カミキリムシ類等の36種が知られている。オサムシやハネカクシの仲間は翅が退化したりして飛翔能力が弱く分散性が低いために、南アルプスのような歴史の古い山岳では隔離分化が進み、種に進化したものと推定される。世界中で南アルプスにしか見られない種や亜種が数多く生息・生育していることは先ず第1の特記すべき事項である。

第2番目は高山性種群の分布南限性である。南アルプスに生息する高山性種群には、世界の分布生息域の中で南アルプスが最も南（南限）の生息地であるという種が多く見られる。言い方を換えると、南アルプスに生息・生育する個体群が世界中で最も南に（すなわち、最も低緯度に）生息・生育している個体群であるという種が多いということである。この代表例はなんと言っても高山鳥のライチョウであろう。ライチョウは南アルプスの動物群を代表するシンボルであるが、それは国指定特別天然記念物、国内希少野生動植物種に該当する希少性のみならず、世界中で最も南に生息している隔離個体群であるという点でも特筆すべき生物種なのである。世界分布図を見るとよく分かるが、ライチョウはグリーンランド、カナダ北部、アラスカ、シベリア北部、スカンジナビア半島、アイスランド等ほぼ周北極のエリアを中心に生息しているが、そこからかけ離れて、しかも極めて小面積に隔離されて日本の生息地（南アルプス、北アルプス）が存在する。そして南アルプスは世界で最も南に位置するライチョウの重要な生息場所なのである。先ほどの世界生息分布図をよく見ると、ラ

イチョウの多くの個体群が北極圏周縁では連続的かつ広範囲に分布しているのに対し、北極圏から遠くかけ離れた日本の生息地（南北アルプス）では極めて狭い範囲に隔離され分布しており、最終氷期以降よくぞこの地に生き残ったものだと感心させられる。現在、急速な勢いで地球温暖化が進行しているが、世界の南限域に生息している個体群ほどその影響は甚大であることが予測され、その点で世界最南限に生息し、しかも狭いエリアに隔離分布し遺伝的多様性が低下しつつある南アルプスのライチョウの行く末は最も危ぶまれ、早急な保護・保全対策が求められるところである。

第3番目は高山性種群の希少性である。上記した南アルプス固有種やライチョウ等ももちろんこの範疇に当てはまるのだが、ともかく南アルプスに生息する氷河期の遺存種は俗に「生きた化石」とも言われており、ほぼ希少種に該当する種と考えて良いだろう。例えば高山蝶のミヤマシロチョウ、もしこの蝶を紹介する名札（名刺）を作るとすれば、それこそ書ききれないくらいの肩書き（説明書き）が必要となる。すなわち、ミヤマシロチョウ：環境省レッドデータブック（以降、RDBと略す）絶滅危惧Ⅱ類、長野県RDB絶滅危惧Ⅰ類、山梨県RDB準絶滅危惧種、静岡県RDB要注目種、環境省認定国立公園指定動物、山梨・長野両県指定天然記念物、ユーラシア大陸極東地域固有種、本州中部特産種（日本）、日本最南端分布個体群（南アルプス）、北アルプス地域絶滅種とまあこんな具合である。この種の並外れた希少性と現在置かれている厳しい状況がよく分って頂けたかと思う。同様に高山蝶クモマツマキチョウは、環境省RDB準絶滅危惧種、長野県RDB絶滅危惧Ⅱ類、静岡県RDB絶滅危惧Ⅱ類、山梨県RDB準絶滅危惧種、長野県指定天然記念物、本州中部特産種（日本）、世界固有亜種（南アルプス・八ヶ岳個体群）となる。そして最後にもう1種、南アルプスの生物多様性の希少性を述べる上で欠かせない鳥類を挙げておく。南アルプスの食物連鎖の生態系ピラミッドの頂点に君臨するイヌワシである。本種は南アルプスの動物群の中では希少性においても頂点に位置する種と考えられ、日本固有亜種（正式和名：ニホンイヌワシ）であると共に、環境省RDB絶滅危惧ⅠB類、山梨県RDB絶滅危惧Ⅰ類、長野県RDB絶滅危惧Ⅰ類、静岡県RDB絶滅危惧Ⅰ類と全て絶滅危惧Ⅰ類（最も絶滅の危険性が高いカテゴリー）に該当し、その他国指定天然記念物、国内希少野生動植物種に認定されている。本種は現在、繁殖率の著しい低下が全国的に叫ばれているのだが（恐らく親鳥の高齢化や遺伝的多様性の低下等が主因）、そんな中で南アルプスに生息する個体群は繁殖の継続

性が確認されている極めて貴重な個体群で、日本固有亜種の存続を担う個体群として、その重要性は揺るぎないものとなっている。

現在、南アルプスは世界自然遺産登録に向けての活動が活発化しているが、上述のように、南アルプスの生物多様性は固有性、分布の南限性、希少性等様々な点において特筆すべき特性を有しており、これらは十分世界に通用し誇れるものであり、これらが礎となって、南アルプスが一日も早く世界自然遺産に登録されることを願って止まない。

南アルプスのライチョウの生息状況

やまなし野鳥の会 村 山 力

ニホンライチョウは、種ライチョウの中で、最も南に隔離分布する日本固有亜種で、本州中部の頸城山塊、北アルプス、乗鞍岳、御嶽山及び南アルプスの高山帯で繁殖し、冬には亜高山帯にも降りて生活する日本の山岳生態系を象徴する種であり、日本の生物多様性を保全していくためにも重要な種です。国指定の特別天然記念物で2012年に環境省のレッドデータブックでも絶滅危惧のランクが上がるなど絶滅が危惧されています。

正式な種類は、キジ目ライチョウ科ニホンライチョウです。全長約37cm くらいの野鳥で、特徴としては、飛ぶことはあまり得意ではなく基本的には地上を歩き、人をあまり恐れないなどがあげられます。古くから日本人に親しまれ、古い記録では、「しら山の松の木陰にかくろひてやすらにすめるらいの鳥かな」と後白河法王の歌にも歌われています。

国内では、新潟県頸城山塊の火打山と新潟焼山に約25羽、北アルプス朝日岳から穂高岳にかけて約1960羽、乗鞍岳に約120羽、御嶽山に約125羽、南アルプス甲斐駒ヶ岳から光岳にかけて約723羽、日本国内では合わせて約3000羽程度が生息していると推測されていました。(羽田他, 1985年)

ライチョウの生活史ですが、3月下旬頃に雄がなわばりをつくり、雌は6月中旬頃ハイマツの下などに卵を産み7月上旬に雛が孵化します。雛は雌親に保護され、9月には親と同じくらいの大きさになります。南アルプスのライチョウは、高山植物であるクロマメノキを好んで食べます。

私どもの行なっているライチョウ調査は、繁殖期には生息地である高山のハイマツ帯を中心に調べ、ライチョウを発見すると、行動、巢の存在、抱卵糞などからなわばりを推定し個体数を推定します。また、繁殖に影響のないようにライチョウを捕獲し、体重等を計測し、個体を識別するために足輪を付けます。足輪を付けた個体を追跡調査した結果、約7kmと10km移動した個体が発見され、ライチョウの飛翔能力は概ね10km程度であることが確認されました。

南アルプスのライチョウの生息数は1981年と2004年の調査結果から、白根三山地域で約41%に激減していることが分かりました。その後、白根三山北部地域(小太郎尾根から農鳥小屋)を継続的に調べて来ましたが、2007年には14%に減少してしまいました。

原因としては、イヌワシやオコジョなど古くからの天敵に加え、チョウゲンボウ、カラス、キツネなどの低山帯の動物の侵出・増加が考えられます。特にチョウゲンボウは、ライチョウの調査中によく確認され、その確認日の7割が7月のライチョウの雛が小さい時期であり、乗鞍岳では雛の補食が観察されています。また、カラスも2006年には北岳の頂上付近に観察され、北アルプスではやはり雛の補食が観察されています。ほ乳類ではテ

ン、キツネの影響が大きく、特にキツネは温暖化の影響もあり、繁殖地が高山帯にも及びライチョウが雛を育てる場所と重なるほどとなっております。調査中もキツネの糞からライチョウの羽が時々発見されます。また、キツネの糞から梅干しのタネや、アルミホイル等生ゴミ由来の採食物が多数確認され、人のゴミにより誘引されて高山に侵出する可能性が高くごみの持ち帰りなど登山者等のマナーが非常に重要となっております。

また、更に近年では、サル、シカの高山帯への侵出も大きな問題であり、特にシカによる高山植物等の食害により、高山帯の植生は大きな被害を受けています。

その他、ライチョウの生息に影響を与えているものに、大腸菌や血液原虫の汚染問題、ハバチによるハイマツの枯死などがあげられます。

また、将来の問題として地球温暖化の影響も危惧されます。気温が上がりますとライチョウの生息地は減少しますので、必然的に個体数は減少します。信州大学によるシミュレーションでは、気温が2度上昇すると南アルプスのライチョウは北と南に生息地が分断され危機的な状況となるとの結果となっております。地球温暖化の原因となる二酸化炭素の排出量の約50%は私たちの生活から排出されており、私たちが環境にやさしいエコライフを実践することが非常に重要です。

現在、ライチョウの保護対策としては、ライチョウを生息地で保護・繁殖させる域内保全と、動物園等で飼育・繁殖させる域外保全が実践されています。

域内保全では、ライチョウは孵化して一ヶ月で雛が約50%に減少してしまいます。これは捕食者や天候の影響が大きいのですが、信州大学の中村浩志先生が乗鞍岳において、その一ヶ月間をケージ内で飼育し、大きな成功を収めています。

また、域外保全としては、富山市ファミリーパーク、上野動物園、多摩動物公園等において、ニホンライチョウの繁殖・飼育技術の確立するため、近縁種のスバーバルライチョウ（ノルウェー産）の飼育、繁殖を行い成果を上げています。

また、国（環境省）では「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」に基づき平成24年10月に「ライチョウ保護増殖事業計画」を策定し、ライチョウ保護に動き出しました。

コウノトリは1971年に、トキでは1981年に国内では野生絶滅し、外国から譲り受け保護を進めていますが、こうなる前に、ライチョウは保護を図るべきだと思います。現時点なら、今の生息地で、日本のライチョウを保護することが可能だと思います。

また、南アルプスではユネスコエコパークの登録を目指しています。これは生態系の保全と持続可能な利活用の調和が目的であり、登録後は適切な保護と利用が期待されます。

今年2013年11月には、ライチョウ会議山梨を私が実行委員長となり開催します。会議では全国の研究者、民間団体・行政関係者などが、南アルプス市に集い、市民の皆様とともにライチョウの現状と、新しい段階を迎えた保護対策について考えてきたいと思っています。是非、皆様のご参加をお願いします。

民話や遺跡からさぐる南アルプスの山岳信仰

韮崎市教育委員会 関 間 俊 明

はじめに

南アルプスがエコパークへ

「ユネスコエコパークもジオパークも、地域の自然を保護・保全し、その資源を生かして、地域振興をすすめる、持続可能な地域社会を作っていくという仕組みです。そのベースになるのは、その地域の自然に対する科学的な情報の蓄積です。そこに広がる地質や地形、土壌、水の流れ、水質、気象の情報や、植物や動物の分布の情報などが、詳しく記載されていなければ、そこをどのように保存・保全していくのか考えることができません。また、その地域の自然がどのように変化しているのか、基礎的なデータがないと評価することができません。これらの科学的なデータは、各地域での最適な活動を考える上で必須です。今後、日本国内のユネスコエコパーク、ジオパークの数は増えていくでしょう。そのこと自体はよいことですが、それを進めていくためには、地域の自然誌の積み上げをしていかなければなりません。」

(http://researchmap.jp/jos5dan86-17729/?block_id=17729&active_action=journal_view_main_detail&post_id=11862&comment_flag=1)

⇒エコパークは地域の自然に対する科学的な情報の蓄積で自然に重きをおいている

⇒歴史文化の評価はあまり関連性がないようにも見える

But⇒その資源を生かしていくことの必要性をエコパークの思想は持っている。

⇒資源を生かしていくための要素として、歴史文化は必要なのではないのでしょうか？

⇒エコパークを目指す南アルプスという地質や地形、土壌、水の流れ、水質、気象、植物や動物といった自然と人間との関わり合いを考えることは、結果的に持続可能な地域社会を生み出すのではないのでしょうか。

今回は、その歴史文化を構成する要素の中から 2 つの視点を紹介してみたいと思います。

一つは、民話を読み解いてみようというものです。もう一つは遺跡から見た景観から読み解いてみようというものです。

1. 民話・伝承を読み解く～民話・伝承は思いつきの作り話ではない～

南アルプスの山々に関わる民話・伝承は数多くあります。今回はその中のいくつかを取り上げながら、民話・伝承の誕生した背景をさぐり、山に対する先人たちの想いを探りたいと思います。

①「牛池と鳥の小池」『韮崎市の民話・伝説』1967年（韮崎市穂坂町三ツ沢等） *⇒『口碑伝説集』を引用

茅ヶ岳山麓の諸村は、水飢饉に悩まされ、そのため年々鳳凰山に雨ごいに上った。山の神はこのことを、ふびんにおぼしめて、黒毛の農牛と、白斑の野鳥に命じて、池を掘らせた。

農牛と農鳥は、毎晩一生懸命池を掘り、農鳥が暁を告げると、二人は早々に山へ引きあげて行った。

ところが或る晩農鳥は、時を知らせることを忘れて、ついに夜が明けてしまった。農牛は帰るときを失い、池のほとりで石と化してしまった。

村人はこれを「牛石」といい、そこには大きな池があって、満々と水をたたえている。牛池又は柳池と呼んでいる。

農鳥を急いで、山へ飛び帰ったが、それから池を掘ることは、中止となった。

鳥の小池は、名の通り小さな池で、深さ十ひろばかりで、清水がこんこんとして、付近の民家の飲料水となって、池底には鳥型の石を蔵して、どんな旱天にも、水がかれたことはないという。



②「赤牛池」『韮崎市の民話・伝説』1967年（韮崎市藤井町南下條） *⇒『口碑伝説集』を引用

およそ400年前、一老婆の額に何病か角が生えた。老婆は常に手拭をかぶって隠していたが、庭で洗濯をしていると、にわかにか風が吹いて手拭をとばし、頭の二本の角を、嫁や近所の某に見られてしまった。

老婆は恥じて、いたたまらず西山までたどり、山中の池に投身してその池の主になった。

今の甘利山の榎池がそれである。その後天文年中領主甘利左衛門の二子が、この



池で釣りをし、誤って溺死したが、その死骸は水底に沈んであられなかった。これは池の主の仕業であろうと、領主は里人に命じて、付近の榎を切り倒して池中に投げ入れ、その上に土石や汚物などを入れて池を埋めた。

その時池中から、一頭の赤牛が飛び出して大笹池に走った。

これは先に投身した老婆の化身で、赤牛は大笹池でも住むことが出来ず、更に中巨摩郡御影村の野牛島の能蔵池に逃げて行ったといわれる。

一説には、同郡源村大嵐の観世音は、この赤牛を祀ったものだともいう。

③「下条婆あと鐘平」『韮崎市の民話・伝説』1967年（韮崎市清哲町青木）

*⇒『口碑伝説集』を引用

昔藤井町下条に一人の老婆があった。病気のためか、額に角のようなものが、生えたので村人たちは、誰いともなく「鬼になった」とか、「鬼婆あ」とかいいふらすので、家に居たたまらず、どこかで往生しようと、心に固くちかって家出した。



方々歩き回ったが、なかなかよい死に場所も、見当たらなかった。止むなく歩を進めて鷹の田まで来ると、大きな池があったので、ここで往生しようと決

心して、池の中へザブンと飛び込んだが、案外浅くて死ぬことが出来なかった。

詮方もなく池からはい出して、また死に場所を探すため、念仏を唱え所持している鐘をつきながら、山路をたどった。

老婆は鳥井峠をすぎ、更に山を超え、谷を渡って甘利山の樫池へ、身をおどらせて不帰の客となったという。「鐘つき平」は「鷹の田」から鳥井峠に行く道ぞいに、この地名がある。

④「山神社」『韮崎市誌』1979年（韮崎市穂坂町上今井）

甲斐国巨摩郡北山筋上今井村山神大権現之儀者人皇四拾貳代文武天皇御宇、慶雲元甲辰年三月十七日西山大笹池平と云地より今の竜王新町赤坂と申処、御鎮座ましまし其後神龜元甲子年神託之告有而十一月中の亥日当所湯ノ沢山二遷座ましまし、然る

に御神体五丈五尺と申伝え往古より御殿無之帯縄と称し三十三尋の縄を引、其中央に腰懸をしつらい誠に威厳にましまし、女人禁制の霊地にして穢火不浄忌(以下欠)



*「竜王新町赤坂」≡「諏訪明神」(『甲斐国志』)

諏訪明神 竜王新町 社地千五十坪除地ナリ祠辺二御井アリ大旱二モ涸ズ此祠ハ永禄慶長ノ番帳二載セテ西山ト称ス古ハ竜王本郷ノ産神ナリ篠原村神主兼帯ス

⑤農牛『甲斐国志』

此山ノ面二春三月頃ヨリ雪消テ消残リタル雪自然二牛ノ形ヲ作ス処アリ土人望デ農候トシ農牛ト称ス

*『山の民俗』岩科小一郎



2. 遺跡景観から見た南アルプスへの先人たちの思い

①伝説と遺跡（苗敷山）

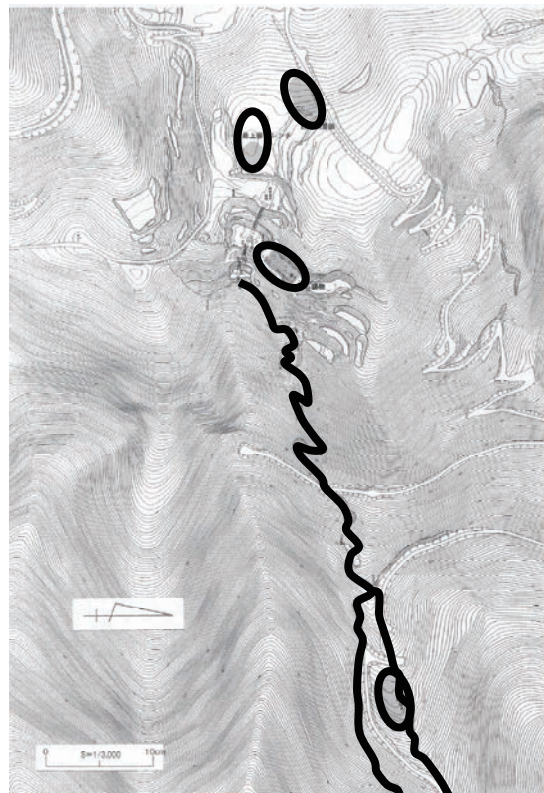
1) 甲府盆地湖水伝説

『甲斐国志』巻之八十四 仏寺部第十二

一 苗敷山宝生寺 真言宗加賀美村法善寺末御朱印七石七斗余山林古寺跡方一町許山麓ニアリ今ハ山上三十町余ニアリ客殿・庫裡・鐘楼・諸堂備シリ虚空蔵堂・同拜殿三扉中八本地虚空蔵右国建大明神左山代王子権現、祭日六月八月本州ニ伝ル所ノ福智能ノ三虚空蔵トハ当寺ヲ併セ云行基和尚一木三像ノ彫刻ナリ寺記云昔洪水ノ時鳳凰山ノ南下ニ仙窟アリ神在丘ト云六度仙人ト云者住メリ蹴裂明神トカヲ戮セ南山ヲ鑿リ洪水ヲ漏シ播殖ノ地ヲ開キ悪竜毒鱗ヲ駆テ五穀ノ種ヲ施セリ故ニ山ヲ苗敷ト号ス今ニ至テ州人六月ノ祭ニハ豊熟ヲ祈リ 八月ノ祭ニハ初穂ヲ小サキ俵ニ入レ以テ詣スヲ恆例トス六度仙人ハ山代里ニ住シ山代王子女国玉姫ヲ娶リテ三男一女ヲ生ム長ヲ風祭王子ト云イ次ハ風間王子・雨宮王子・藤巻姫ナリ地ヲ割テ四郡トナシ風祭ヲ巨麻ニ封ジ風間ヲ山梨ニ封ジ雨宮ヲ八代ニ封ジ藤巻ヲ都留ニ封ジテ遂ニ退テ神トナル国建明神以後四子亦各神トナル刀八毘沙門・山梨明神・八代権現・諏訪明神、是ナリト云エリ、以下略)

『甲州噺』「國母地蔵駒裂明神之事」

「甲斐國の往昔は、水海にて村里人家も少なく候所、山梨郡東光村、東光寺之法城寺之國母地蔵と、巨摩郡鰐澤村之枝郷、鬼島村之末柳川の洲崎に小宮有之、駒裂明神との方便を以、右山間の岩石開き給うによりて、一國の水干落村里田畑も多く出来る由有」「巨摩郡甘利の西の方に、苗敷山と云有、此山上に立て玉ふ虚空蔵菩薩は、其節國中の水干瀉へ稲の苗を與へ給ふ」



2) 苗敷山と人との関わり

・山頂部では、時代によって人々の活動した痕跡のあらわれ方が異なります。

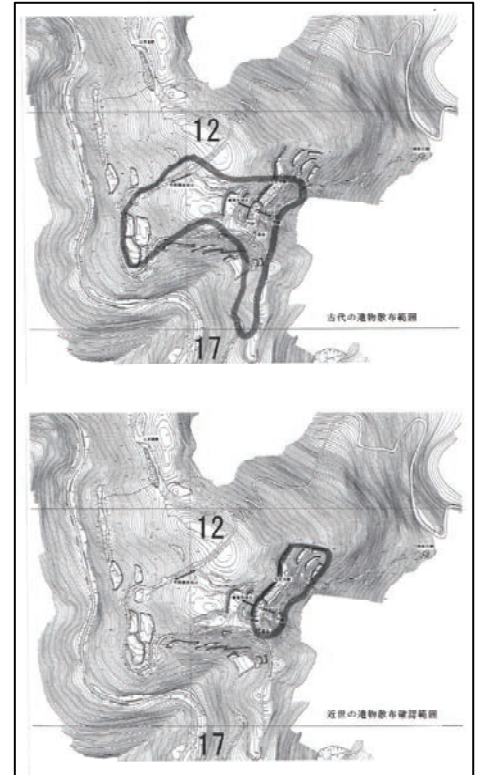
・古代

10～11世紀の竪穴住居跡が重複しながら8軒程度あることが分かりました。

どの住居跡も調査面積が狭かったですが、遺物量は多いです。主なものは土師器の坏で、その他に土師器甕・羽釜、須恵器、緑釉陶器などがあります。

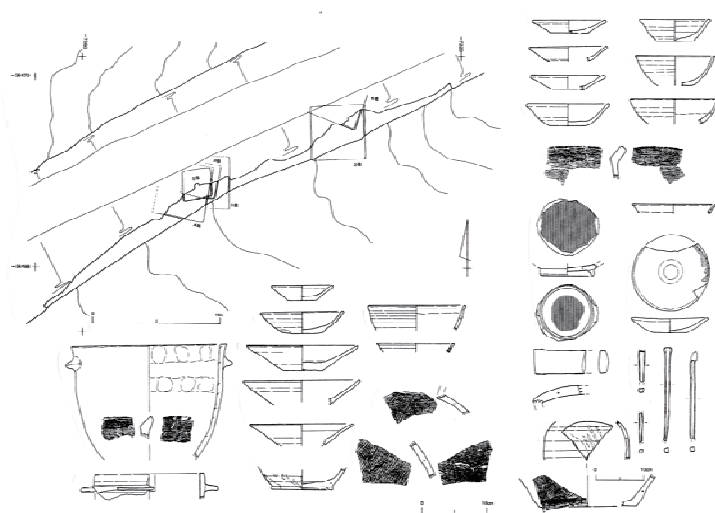
平地の一般的な集落跡との相違点は次の通りです。

- ①器の種類は類似。
- ①土師器坏で灯明皿として使用された痕跡を示す資料が多い。
- ①朱墨と考えられる痕跡のある硯が存在。
- ①釘等と共に器種不明の鉄製品が存在。
- ①竪穴住居にはカマドや棚状施設が存在。
- ①「奉」の文字の書かれた墨書土器が出土。



古代・近世の遺物散布範囲概要図

時代により遺物散布範囲が異なります



・中世

『甲州噺』で甲府盆地へ苗をもたらしたとされる虚空蔵菩薩とともに本殿の三扉に祀られていたものに明星天子と不動明王があります。虚空蔵菩薩の応化である明星天子は、苗敷山の御正体であったと伝えられている法善寺(南アルプス市)の銅像虚空層菩薩坐像にあたるのが近年指摘されています。また、不動明王は現在の奥宮本殿に安置されていた三宝荒神の可能性が高く、三面三目六臂の木造明王形立像(右写真)だといわれています。



・近世

奥宮の本殿をはじめ、庫裡跡の礎石建物跡や門跡などは江戸時代のものになりますたくさんの陶磁器が発見されています。



①県内では滅多に見ることのできない中国(清)からの輸入品があります。

①お酒を呑むための徳利やお猪口などが発見されています。

①17世紀から18世紀のものが多く、江戸時代の初めの頃や明治時代のものはほとんど発見されていません。



3) 時代と共に変わる山への想い

②人はいつから山に関心をもったのだろうか？～山と太陽がおりなす景観～

1) 考古学の醍醐味

2) 遺跡から見た風景

・ 女夫石遺跡（韮崎市穂坂町）縄文

春分の日の一ヶ月後、秋分の日の一カ月前の日没

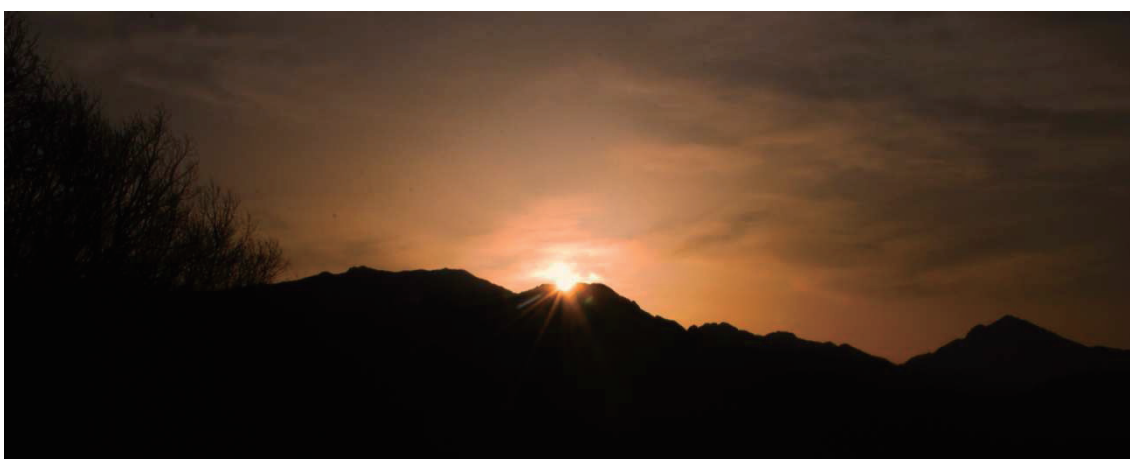


春分・秋分の日の日没



「カミール 3D Ver8.2 Copyright(c) 1994-2004 SUGIMOTO, Tomohiko.」にて作成

春分の日の様子（現地にて）



3) 時代を越えた共通点

・女夫石遺跡の消長

巨石の周りで土偶や土器などを使った祭りのようなことをしていたのは、縄文時代中期。巨石が徐々に埋まり、隠れるのとほぼ同時に女夫石遺跡から縄文人たちの活動痕跡は消えています。その後、縄文人が女夫石遺跡に現れるのは、縄文時代晩期。晩期の土偶が発見されています。



・土偶に込められた祈りと地蔵ヶ岳賽の河原のお地蔵様にこめられた祈り

土偶は一般的に女性（妊婦）や精霊などを表現したものだといわれています。お腹のふくらみや乳房の表現、安産型と呼ばれるお尻の形などから見ると、新しい命との関わりがありそうです。女夫石遺跡の縄文人たちにとっても土偶はやはり、生命の誕生という意味合いが強かったのではないのでしょうか。



地蔵ヶ岳の賽の河原には、お地蔵様が奉納されています。子授りの祈りを込めて奉納されました。

おわりに

今回お話しさせていただいたのは、先人たちが伝えてきた民話・伝承を現在の視点で捉えなおしてみた場合の考え方の一つです。また、先人たちが見たであろう景観を想定した上で南アルプスの山々に先人たちが感じていた想いについて私見を述べさせていただきました。学問的には証明することが困難な分野ではありますが、その研究に挑戦できることが南アルプスの山々の魅力の一つなのではないでしょうか。

主要参考文献

- 佐藤八郎校訂 1968 『甲斐国志』 雄山閣
- 北巨摩郡教育会郷土研究部 1935 『口碑伝説集』
- 功刀吉彦 1993 『苗敷山穂見神社の研究』
- 向山玉葉編 1932 『甘利山と鈴蘭の由来』
- 韮崎市誌編纂専門委員会 1979 『韮崎市誌』
- 韮崎市教育委員会編 1968 『韮崎市民話伝説集』
- 韮崎市教育委員会・苗敷山総合学術調査研究会編 2011 『苗敷山の総合研究』
- 岩科一郎 1968 『山の民俗』

登山史と文学からみた南アルプス～富士山との比較で

日本山岳会 深 沢 健 三

・登山の歴史

日本の登山はいつから始まったと思いますか。恐らく世界でも古い方、縄文時代には八ヶ岳が登られていた。鍬が編笠山中腹で発見されている。2千m付近の登山道沿いで。登山か、狩猟か、分からないけれども登っていた。イタリアアルプスで見つかった「アイスマン」は、5,500年ぐらい前。標高は3千mぐらい。こちらは、理由は不明だが、追跡者に追われてアルプスに逃れたが、死亡して氷漬けになった。死因は石による殴打。山に登った痕跡としてここまではたどることができる。

その後、西洋では、アルプスは魔物が棲む場所として近づかなくなり、日本は信仰の対象として登られるようになった。平安時代にはもう富士登山が始まり、万葉集に詠まれ、竹取物語では、かぐや姫は富士山に帰って行った。富士山以外の主要な高山はほとんど登られていた。

近代登山が始まったのは、ヨーロッパアルプスで18世紀、日本にその思想が輸入されたのは幕末の19世紀。信仰や生活のために登られていた日本の山に、「初登頂」を争う変則な形で始まった。その証拠を残すための登山記が盛んに書かれた。

・山と文学について

今日の与えられたテーマは「登山史と文学から見た南アルプス～富士山との比較で」。「文学」の定義が難しいので、記録的な要素の強い物、研究書や論文、報告書など外して、なんとなく文学っぽい著作を選んでみた。

まず小説を探した。南アルプスを主要なテーマにしたものは、ほとんどなし。山に関連して多いのは記録を中心にした登山記、紀行文、随筆、短歌、俳句、詩は結構ある。しかし小説がない。「強力伝」や「芙蓉の人」「剣岳点の記」など山岳小説が多い新田次郎にも、ほとんどない。短編の「三つの遭難碑」が北岳バットレスの遭難と、遭難碑を建てようとする遺族と山岳会の心理と軋轢を書いたもの。「縦走路」という中編では、男女4人の恋の葛藤を、登山を通して描いたもので、最終章がバットレス登攀になっている。

山本周五郎の「山彦乙女」は、甘利山から鳳凰山が舞台で有名だが、主要なテーマではない。他には「夜霧の半太郎」という短編に葦崎が重要な舞台として描かれている。葦崎からの甲斐駒ヶ岳の描写は、ゆかりがあった作者ならで

はの描き方だと思える。

私の勉強不足で、ほかには「マークスの山」とか、西村寿行の「滅びの笛」などに、それなりの位置を占めて南アルプスが登場する。プロレタリア系で窪田精という人がいるが、高根町の出身で、この人の短編「霧の南アルプス」というのがあり、これは北岳登山が舞台となっている。

文芸評論家の近藤信行さんは、「日本の山の名著」の中で、こう述べています。「昭和期にはいつて、山岳文学は登山家の手でという掛け声に呼応するかのようになり、山の書き手が輩出したが、登山を心得た物書きが山を素材とすると、ピューリタリズムやヒロイズム、センチメンタリズムに墮してしまう恐れなきにしもあらずとの感を免れなかった。山は書けても人間が書けていないのだ。むしろ山の小説は不毛の分野だった。昭和三十年代前後から、井上靖の「氷壁」、新田次郎の「強力伝」その他、北杜夫の「岩尾根にて」「白きたおやかな峰」などがあらわれたのは特筆すべきであろう。しかし山の文学は、依然として紀行文が主流である」と分析している。

私の個人的好みでいうと、山岳文学で一番印象に残っているのは、森村誠一の「青春の源流」(4巻)。時代は戦前、戦中からベトナム戦争にかけて、北アルプスと山小屋、ベトナムを舞台に、2人の登山家にそのマドンナを絡ませ、人生とは何かを問いかける小説で、登山家の一人は塩山市の中村医院の先生の兄がモデルとも言われ、登山愛好者として圧巻と感じたのは、徴兵忌避をして冬の北アルプスの山小屋に隠れるくだり。少し古い作品だが、一読をおすすめしたい。

以下、南アルプス、富士山と文学にかかわる事項を年表的にまとめてみたので、紹介する。

登山史と文学から見た南アルプス～富士山との比較で

①人類と登山「登る」という歴史

人類の最高到達地点の変遷	メキシコにポボカテペテルという5452mの山がある。1523年に登られるまで、日本人が最高到達記録「富士山」を持っていた。日本人は平安時代までに富士山に登っていた。都良香の「富士山記」に山頂の描写がある。これは深田久弥が「日本百名山」の富士山の項で書いている。
	ところが、20年ほど前、スイスとイタリアの境のアルプスの3210m地点で、氷雪に半身埋もれた人間のミイラが収容された。調査の結果、約5300年前の遺体と分かった。結果、1000年前くらいまでは、このアイスマンが最高到達者、その後、日本人が抜いて500年前まで日本人が記録を保持していたことに、現代科学の分析によると、アイスマンは46歳前後、身長160㎝、体重50㎏で、矢で左肩を打たれ、モミの生育地から低地のアサダ生育地(胃にアサダの内容物)に下り、再びトウヒの生育地に長った逃避行の末、倒れていたその場所で追跡者に追いつかれ、石で殴られ息絶えたということが分かった。
	ただし、山へ登るといふ行為の背景が、アイスマンは逃避行、それに対し日本は信仰が目的でしかも単身ではなく、多くの底辺があつての登山だったことをうかがわせる。
	3210m 5300年前(縄文時代前期後半) スイス・イタリアアルプス アイスマン
	3776m 1200年前(平安時代) 日本の富士山 信仰
	5452m 1523年、490年前(戦国・大永3、信虎の時代) メキシコのポボカテペテル
	4807m 1786年、227年前(江戸中期・天明6) モンブラン初登頂
	4940m 1918年、95年前(大正7) ヒマラヤのダイチャ(ゴーチヤ)・ラ 鹿子木員信(甲府生まれ) 初のヒマラヤ4000m登頂
	8848m 1953年、60年前(昭和28) エベレスト初登頂 イギリス隊

②詩歌、物語への富士山、南アルプスの登場

	富士山は7、8世紀には「日本一の山」として詩歌に登場する。当時、「南アルプス」という概念はなかったが、甲斐の国に高い山があり、「甲斐が根」「甲斐の白根」と呼ばれていたことが、9世紀には都にも知られるようになっていた。
<奈良・平安時代>	
万葉集(600年代後半～700年代後半)	万葉集巻3・319番歌 高橋虫麻呂 「なまよみの甲斐の国 うち寄する駿河の国と ちごちの 国の御中ゆ 出で立てる 富士の高嶺は…」 富士山は多く出てくるが「甲斐が根」はまだない
竹取物語(9～10世紀)	「竹取物語」で、翁の娘(なよよ)のかぐや姫は富士山に帰って行った
古今和歌集(912年ごろ)	「甲斐の白峯」の登場。小夜の中山と南アルプス
	醍醐天皇の延喜5(905)年、和歌集編纂の勅命。7年後に完成。紀友則、貫之、凡河内躬恒、壬生忠岑が編者
	凡河内は894年に甲斐権少目として赴任。907年に丹波へ。壬生は甲斐と縁があるかあまい。
	百人一首「心あてに折らばや折らん初霜のおさまでわせる白菊の花」
	以下、河村秀明「雲は山脈を流れて一甲州と文学」(1970、東都山梨新聞社刊 葦崎出身)から当時、甲斐歌、甲斐節ともいえる節回し(メロディー)が都で流行していた。エキゾチック
	甲斐歌と題して以下の2首を古今集に入れたのではないか

	甲斐歌	
	1097 甲斐が嶺を さやにも見しが けけれなく 横ほり臥せる さやの中山 (甲斐の山をはつきりと見たい。心なくも横になって邪魔をしている中山よ、どいてくれないか)	
	1098 甲斐が嶺を ねこし山に吹く風を ひとつにもかもや 言つてやらむ (甲斐の山々を越えてゆくこの風が人であつたらなあ。あの人への便りを頼むのに)	
	「甲斐が嶺」北岳と特定しているものか。西方の高い山々の方が現実的	
	上記のほかに伝えられているものとして以下があり、甲斐歌あるいは甲斐歌謡という	
	甲斐が嶺を さやにも見しか 心(けけれ)なく 横ほり立てる さやの中山	
	甲斐が嶺に 白き雲かや いなさをの け衣や 晒す手作りや 晒す手作り	
	甲斐人の 嫁にはならじ 事辛し 甲斐の御坂を 夜や越ゆらむ	
	「土佐日記」には「西国なれど甲斐歌など歌う」という記述があり、船出に歌う縁起歌?として歌われていた	
	当時の交通事情 都と東国を結ぶ官道は東海道と、信濃經由の東山道。山梨へは東海道から支線があつた。東海道甲斐路とよばれ、御殿場付近で東海道と分かれて山中湖、河口湖を経て大石峠か御坂峠を越え甲斐の国府(笛吹市一宮町または春日居町)に通じていた。最近、河口湖東岸の新道路付近で古代の官道跡が発掘された。	
	●9世紀までには富士山登頂者(都良香「富士山記」)	
	梁塵秘抄(1180年ごろ)	
	平安時代末期に編まれた歌謡・俗謡集 編纂は後白河法皇	
	「四方の霊験所は 伊豆の走湯 信濃の戸隠 駿河の富士の山 伯耆の大山…の道場」(修験道の聖地)	
	「甲斐にをかしき山の名は白根、波崎、塩ノ山」などが登場	
	「甲斐の国より罷り出でて 信濃の御坂をくれくれと 遅々と鳥の子にしもあらねども 産毛も鬘らで帰れとや」 (遊女が男を誘う歌と解釈されている)	
	③甲斐の白根の登場	
	甲斐に富士山とは別に雪白い高い山があると知られていた。これが南アルプスの一部、北岳や間ノ岳、農鳥岳の白根三山を指すことは容易に推察できる。人間に「ものあわれ」を感じさせる山として使われている	
	<鎌倉時代>	
	海道記(1225年ごろ)	
	1225(貞応4)年ころに成立。京の隠者の鎌倉までの紀行文。	
	「手越を過ぎて 梢を見れば浅緑、これ夏の初なりといえども、叢を望めば白露、まだきに秋の	
	「惜しからぬ 命なれども 今日あれば いきたるかいの しらねをもみつ」	
	手越＝静岡市駿河区、安倍川の西にある小丘?	

続後撰和歌集 (1251年ごろ)	1251(建長3)年ごろ成立。巻10に海道下り 「宇津の山辺の 藁の道、心ほそくも打越えて、手杖を過ぎてゆけば、北に遠ざかって雪白き山あり。問えば甲斐の 白根といふ。其時三位中将おつる涙をおさへて、かうぞ思い、つづけ給う」 「惜しからぬ 命なれども 今日までぞ つれなきかいの しらねをもみつ」
平家物語(1371年ごろ)	1371(応安4)年ごろの成立。巻10、海道下り 「宇津の山辺の 藁の道、心ほそくも打越えて、手杖を過ぎてゆけば、北に遠ざかって雪白き山あり。 問えば甲斐の白峰といふ。其時三位中将おつる涙をおさへて、かうぞ思い、つづけ給ふ」 「惜しからぬ 命なれども 今日までぞ つれなきかいの しらねをもみつ」
西行法師(1118-1190)	きみ住まば 甲斐の白嶺のおくなりと 雪踏み分けて ゆかざらねやは (あなたが住むのならば、甲斐の白根の雪を踏み分けてでも行くよ) 「山家集」にはなく「聞書集」 雨しのぐ 身延の郷の かき柴に 巢立ちはじめ 鶯のこゑ (身延の里の垣根にしている柴の木に、巢立ちはじめのウグイスの声がかきこえるよ。春だなあ
	西行法師は甲斐には足を踏み入れているか疑問といわれる。南部に西行峠があり、「盆中の富士」の展望が有名
④甲斐の白根(峰)とは	甲斐が嶺、甲斐が峰、甲斐が根一など表記は様々。 どの山あるいは山塊を指しているのか。一方には富士山が万葉以前から存在していた。 高橋虫麻呂「なまよみの甲斐の国 うちよする駿河の国と ちごちの 国の御中ゆ 出で立てる 富士の高嶺は 雨雲も 行きばばかり 飛ぶ鳥も 飛びも上からず 燃ゆる火を…」 この富士山に対応するとすれば、「甲斐が嶺」は、雪白き高い山、かつての中心地酒折や、国府の置かれた 一宮か春日居辺りから見える白根三山がふさわしい。 都から派遣されてきた役人によって、甲斐には富士山に並ぶ高い山があることが知られ、平安時代になると、 東海道筋から北に白い山が見え、それを甲斐が嶺と呼んだのではないか。一般的に甲斐の山々ではななさそう 東海道筋から見えるのは南アルプス南部の山々だった
⑤俳諧への山の登場と地誌的知識欲の江戸時代	読み本の登場＝南総里見八犬伝、東海道中膝栗毛など、爆発的な出版ブーム 背景に経済的向上と識字率世界一の高い教育レベル。江戸で識字率80%、70%。パリなど10%。しかも支配層だけ。 江戸時代までは眺める山が主だった。富士山など信仰の山を除いては。富士日記(賀茂季鷹)＝白根の記載なし
<江戸時代> 山口 素堂(1642-1716)	目には青葉山郭公初鰓 ほぞ落ちの柿の音聞く深山かな 北杜市白州町の上教来石。裕福な山口家の長男。20歳で家督を弟に譲り江戸へ。芭蕉と親交を結ぶ。 学問、文芸、漢詩、能楽、書、茶道、琵琶の演奏など多彩。俳諧一筋の芭蕉とは違う博学者 「ほぞ落ちの一」は、58歳の夏、身延詣りで。江戸の喧騒とは違う故郷の山中の静かさ、そこに身を置く素堂の姿

松尾芭蕉(1644－1694)	2度の甲州行。1682(天和2)芭蕉庵消失。翌年、谷村へ逗留。1685(天和5)年、関西の旅の帰途に再び立ち寄った。この時の句に「行駒の妻に慰むやどり哉」。白根の山も眺めたはず。
一瀬 調実(1652－1725) (いちのせ・ちようじつ)	現存する最古の江戸時代の俳書「俳諧 白根嶽」(1685一貞亨2)の編者。本の題名に白根が使われている。「今、甲斐の白根の高おろし静かに、鶯の声耳に緩し。然るに田夫野子が俳諧のその水上や御江戸の調和壺瓢の滴りを市川に汲みてかく綴ることになりぬ。」
	江戸時代、甲州ではほかに多くの俳人を輩出した
甲斐名勝志(1780年代)	1786(天明6)年、萩原元克。一町田中。1805(文化2)年没。甲斐の人間が初めてまとめた地理・名勝の本。この中で甲斐八景の一つとして
	白根夕照 此夕のこる日かけははれはまむかふしらねの雪そくまなき(中山大納言為親卿) 地誌の部
	「山梨岡」の項で 甲斐かねに咲にけらしなあし引きの山なし岡の山なしの花(能因法師)
	「白嶺」の項で かいがねとも、かいのしらねとも云う名所なり。此山四時雪あり。駿河の国大井川の源は此山中より出る。一説に、かいがねは一山の名にあらず。すべて甲斐の高山をいふといへり。
	ここで12首を掲載。古今集、後拾遺集、続後撰集、新千載集、玉葉集、新拾遺集など
真見寒話(1752年?)	宝暦2年?。甲府勤番・野田成方から3代で見聞をまとめた。
	甲斐が根山 白根の岳をいう。また白根を農鳥山ともいう。此の農鳥の名は五六月に至りて雪の消え方、鳥又は鋤鍬の形を顧わずによりて名付く。
	という。
	続けて西行法師の歌 甲斐が根の麓の山は皆暮れて夕日残れるはつしかの山
	能因法師の歌 甲斐が根に咲にけらしな足引の山梨岡の山梨の花
	を掲載
	さらに「白根が嶽」として、富士に続きての高山也。盛夏までは雪あり。其雪の年中絶えざるを以て、白根岳の名あり。此山を甲斐ヶ根もいひ、農鳥山とも云。その謂れは盛夏雪の消方より鋤の形、或は鳥の形頭わるとある。
富士日記(1790年)	寛政2(1790)年、京都上賀茂神社の神官、賀茂季鷹が東海道一甲州街道一富士道一富士登山一御坂路一甲府一江戸一京都の旅。紀行を「富士日記」として書き残した。
北岳の祠	「寛政7年」の銘がある祠があったと小島烏水の「白根山脈縦走記」に記述あり
鳳凰山に遊ぶ記(1824年) (大鳥ヶ嶽に遊ぶ記)	文政7(1824)年長月(9月)4日、葦崎・穴山の聽見神社神官、生山正方、円野の神官、歌田昌行と案内者など7人が念願の鳳凰山登山を達成した。3日の午後11時に丸野の昌行の家を出発。御座石から燕頭山、賽の河原に登りついで鳳凰山の地藏仏(オベリスク)の基部を一周して中の岳、南の岳と縦走して中道を下山。丸野に午後9時、帰着した。22時間の強行軍だった。鳳凰登山が一般的に行われていた。賽の河原で酒を飲み、食べて宴会。四囲の山名を列記し、山の名前をよく知っていた一などの事が分かる。「あし引きの山分衣 うらやすく 大鳥かねを けふみつるかも」

甲斐国志(1814年)	江戸時代後期、1814(文化11)年に編纂された甲斐の国の地誌・歴史の書。全123巻。山梨の最も基本的な百科事典山について全県の詳細が記述されている
▽甲斐の白根とは	●白峯三国の西の鎮め。甲斐が根これにして、南北に連なりて三峯あり。最も高きを指して今は白峯と称す。栗川筋荒倉村に属せり。絶巔に攀登するには、盛夏(土用)をもって候とす。山上に日の神を祀り、その像は黄金を以て鑄る。長さ七寸ばかり、入るに銅室をもってす。高さ二尺二寸、広さ方八寸、その四隅に鈴を掛く、風吹けば声あり。中峯を間ノ岳、或いは中ノ岳と称す。この峯下に五月に至りて雪漸く融けて鳥の形をなす所あり。土人みて農耕とす、故に農鳥山とも呼ぶ。その南を別当代(べつとうじょう)と云う。皆、一脚の別峯にしてすべて白峯なり(甲斐国誌)
	この時代になって、三峰を合わせて甲斐が根と呼び、最も高いのを白峯(白根、白峰)、中央を間の岳・中の岳
	農鳥岳、南を別当代と細分化している。
	現在は北岳、間の岳、農鳥岳。農鳥がなぜ南に下ってしまったか。
	それは「野尻抱影」の項で
南総里見八犬伝 (文化11年スタート)	滝沢馬琴 1814(文化11)年から1842(天保13)年まで28年間、全106冊(巻)。 「仁・義・礼・智・信・忠・孝・悌」
	石和・指月院、武田信昌、めぐりあり甲斐ありとても信濃路になお別れ行く山川の水(82)
	諏訪湖の水は太平洋へ注ぐが、それより北は日本海へ注ぐ。
	甲斐があるの掛詞。指月院は77回以降の重要な場所。剣士らの集合場所に。
	●1865(慶応元)年、マッターホルン(4478m)登頂。ヨーロッパアルプスの黄金時代終わる。
⑥西洋流登山思想の流入と普及	
	一体となる山、信仰の山から⇒科学する山、征服する山へ。初登頂という概念も
	信仰登山の山や、山仕事、測量などで登られていた山に、初登頂を誇る珍現象を生む。手柄、名誉争い
	多くの記録が「山頂を征服した」「ついに絶巔に立った」などオバーバーな表現
	一方で志賀重昂の「日本風景論」が登山者に影響を与えた
<明治以降>	
ウエストン(1861-1940)	日本に近代登山の考えを伝え、広めたイギリス人。3回来日し、北・中・南アルプスなどに多くが初登頂。 登山記を「日本アルプス 登山と探検」「極東の遊歩場」にまとめて発刊。南アルプスは「極東…」に。 地蔵仏初登攀のエピソードなど。 広河原に顕彰のレリーフ。

●1969(明治2)年、芦倉村村長の名取直衛らが市川郡役所に「甲斐ヶ根開闢願書」を提出	
鹿子木員信(1884—1949)	熊本藩士の子。父親が維新後に甲府へ。甲府生まれ。すぐに東京へ。「信」は信玄から。「かずのぶ」著書に「アルペン行」ヒマラヤ行」。1918(大正7)年、ヒマラヤの8000m峰、カンチエンジュンが近くまで入り、ゴーチャ・ラ(峠、4940m)に達した。ヒマラヤに足を踏み入れた最初の日本人であり、当時の最高地点到達者。慶応大教授時代には山岳部結成(1915=大正4年)に尽くした。アルペン行、ヒマラヤ行は、日本人に世界の山に目を向けさせる最初の登山記となった。
志賀 重昂(1863—1927)	「日本風景論」1894(明治27)年刊。日本の登山史、文学史に大きな影響を与えた。「しげたか」 火山＝八ヶ嶽二九三三米、富士山三七七八米、茅ヶ嶽一七八〇米、金ヶ嶽一六六〇米 花崗岩の山＝甲斐の駒ヶ嶽三千米突以上、三千米突に近い鳳凰山 甲斐の白根山系は秩父層 日本列島の位置から日本は①気候・海流が多く生物が多様であること②水蒸気が多いこと③火山が多いこと④浸食の地形が多いこと⑤登山の気風を興すべし。
大町 桂月(1869—1925)	紀行文の革命 土佐山内藩の藩士の子。東京帝国大卒。「日本名山誌」を書くため、まず山梨へ。 1924=大正13年7月、韮崎から甲斐駒、白根三山、八ヶ岳、甲武信ヶ岳、金峰山、御坂の山々 麓より頂までもふじの根をせおひでのぼる八ヶ岳かな 酒飲みで高根の上に吐く息は散りて下界の霧となるらん 紀行文について「日本の従来紀行文家なる者の多くは、唯文章を面白くせんがために、その場所につきちり当て嵌まるや否やを考えず、徒に綺麗な文句をならべんと努むる結果は、往々に実景と懸け隔てたる形容の文句を使っている。またそれらの形容の文句がどこにでも動かされ、何の場所にも当て嵌まるような文句を弄ぶの弊がある」 雑誌「文章世界」1906=明治39年6月号
⑦名譽より山との一体感求めて 木暮理太郎や小島烏水	「登山の紀行文」というスタイルを作っていく
木暮理太郎(1873—1944)	増富・金山平に顕彰のレリーフ。毎年10月の第3日曜日に木暮祭(増富観光協会、日本山岳会、県山岳連盟)開催 1895(明治28)年8月、木曾駒に登った後、続けて甲斐駒へ。高遠から甲斐駒一黒戸尾根一白須。台風の中、案内人なしの登山を強行。駒ヶ岳神社で供物の落雁を食べて空腹をしのいだ。 山頂で測量(八ヶ岳と連携)の仮小屋に泊めてもらう。落雷があつて作業員1人が死んだことを聞いた。 鳳凰などの展望の後「しかし私をのけぞらすほど驚かしたものは、雲の厚襖を突き破って屹立した北岳の巔であった。 (略)私は目の前に突き出された巨大の拳個のやうに、力の籠った山の姿を瞳に焼き付けながら「よし、来年はあれに登ろう」と独語した。 高遠では、「名家の末路に花を飾ることをせず、後ろ足で砂をかけた腰抜け武士の多きに憤慨していた」ので義侠心で奮戦の仁科五郎盛信の英霊を用い、涙を流した」と書いている。(上巻530p)

小島 烏水(1873—1948)	高松生まれ、横浜育ち。銀行員、「うすい」 「日本アルプス」全4巻。1910(明治43～1915(大正4)年にかけて発刊。 白峰山脈に入る記」は1907(明治40)年夏に鱒沢一湯道一西山温泉で早川を溯行(1巻) その前、明治37年、雑誌「太陽」に「甲斐の白根」という文章を発表。実際に登ったように書いたが、登らないで 書いたことが発覚した。前県立文学館長の近藤信行さんが書いた「小島烏水一山の風流使者伝」に詳しい
	甲斐山岳会、白鳳会、平賀文雄らと交流。南アルプス葎崎登山口を示す英文の看板を書き、それは七里岩の末端に掲げられていた
●1881(明治14)年8月、ア	ーネスト・サトウが農鳥、間ノ岳初登頂。北岳が低いとみて北岳初登頂の大魚を逸す。
中里 介山(1885—1944)	三多摩生まれ。自由民権の風を受け、青年期には社会主義に傾倒、幸徳秋水らと行動した。 長編小説「大菩薩峠」は、奈良田、甲府、有野、郡内などが登場する。「白根山の巻」もある。 峠に文学碑、峠下に「介山荘」
飯田 蛇笏(1885—1962)	境川の俳人。「芋の露 連山影を 正しうす」。「だこつ」 境川の山蘆からは茅、ハツ岳、甲斐駒、白根三山、鳳凰三山が一望。諏訪口の向こうには北アの常念岳も。
野尻 抱影(1885—1977)	本名・正英(まさふさ)。1907(明治40)年5月10日、甲府中学の英語教師として赴任(友人の父親大島正健が校長で 教師を探していた。星の先生 1908(明治41)年、山梨日日新聞に桜衛生の名で「甲斐が根」を連載。白根三山」の観察日記。その中で「甲斐に あらば請ふ山岳を誇れ、山岳を誇らば請ふ我らが甲斐が根を誇れ、甲斐が根を措いて何処に甲斐の威厳があらうや」 中学の物理教室にある天体望遠鏡で星と山を見続けた。 別当代に農鳥(白い白鳥、頭が左向き)が現れたのを現認、スケッチして小島烏水に連絡。最終的に別当代が、 農鳥岳になっていった。実際には間ノ岳にもはつきりした農鳥が現れる。野尻先生、小島烏水がもう少し慎重だった なら、甲斐国志の呼び方が定着していたにちがいない。 「山峡暮春」。野尻と白峰は切っても切れない仲だと皆から言われ、白峰と私はシノニム(同類)だつてその気になっていた。 その白峰へ、これも中学生の昔からすっかり自分の所有と決め込んでいるオリオンが夜夜沈むのである。ある晩、それを眺めている 間に、私は何か妬ましさを感じたのである。誇張ではない。若いということとは他愛もないことである。
	「野呂川谷の樵夫たち」声安一夜叉神一杖立一シレイ沢一広河原一北岳一広河原一荒川一以下予定 農鳥岳— 間ノ岳—北岳—広河原。暴風雨で迷い、野呂川上流の両俣へ出た。ここに樵夫小屋があり助けられる。翌日、帰るときに懐中時計を 見ると、親方が「時計を合わせろ。するとここにいた声安の20数人の樵夫全員が一斉に銀時計を付いた。銀時計を出した。「冬に帰ると 金の使い道がなかった俺たちを狙って甲府のあきんどがいろんなものを売りに来る。去年は時計を買った」
●1886(明治19)年秋、伊奈街道開通。中富町切石と長野・飯田を結ぶ。新倉—転付峠—二軒小屋—三伏峠—大河原	
◎花開く山の文学	

中村清太郎(1888－1967)	<p>筑ヶ岳の積雪期初登頂。1911(明治44)年12月1日。 「山岳掲仰」(昭和19年刊)。「冬の白峯山脈彷彿」「大井川奥山の旅」の章立てで、ほとんどを南アルプスに。 「旅と登山」の項で「山では日も、土も、生類も、静けさも不思議さも、そこには彼の求めるものは無限にある。ありすぎて途方に暮れるばかりだ。面白さ、ありがたさに畏ろしさが加わった。天地が止めどもなく広くなり、深くなり、苦しきはすぐぬ忘れて、さらに奥へ奥へと心が惹かれ、なんだかぞくぞく寒気のするようなきもち(になる)だった」</p>
●1891(明治24)年12月、ウエストンが冬季富士登頂	
尾崎 喜八(1892－1974)	<p>詩人 1951(昭和26)年、日本山岳会山梨支部に招かれ、甲府で「詩と自然」という題で講演。翌年には甲府二高50周年に際し校歌を作詞</p> <p>一 立ちならぶ四方の山々 めぐり出る豊の流れ 美はしや甲斐の國中 歴史古る大さ都よ ここにして母校のいらか 玉の窓空に映えたり</p> <p>二 身は鍛へ心清めつ いや深く学の栄に 世の幸と国の栄に つくさなむ高き理想よ その夢のうつつの姿 まなかひの富士に見るかな</p> <p>三 峡深く結ぶ粗玉 磨かずば光あらじな 秀つべき資性のささま 生い立たず愛の母校よ 称へなむとこしへかけて 甲府なるわが二高</p>
水原秋桜子(1892－1981)	<p>登山が好きなのは俳人の代表格 「南アルプス展望」という随想。南ア展望はこれが3回目と書いている。1回目は最終で新宿を出て塩山で下車。駅前の茶店を起こして炬燵に入れてもらい、明け方の上り始発で勝沼下車。「寒によく見えた」。2回目は大菩薩登山で。 12月15日、前日は雨、夜半から猛烈な北風。朝にやんだ。(低気圧が通り過ぎて大陸から高気圧が張り出して、列島を覆い始めた) それが分かるほどの山好き。目指すは勝沼駅。朝10時に家を出て13時頃着。帰りは15時50分の列車。いられる時間は2時間半。 10句ほど詠むつもりだった。小春日の温かさで快晴無風。読み通り、白根三山、悪沢、聖、甲斐駒、鳳凰、前山が素晴らしかった。 駅の前山(ぶどうの丘。本当は寝姿山。女性が仰向けで寝ている姿)。左に大きめの乳房、ぶどうの丘がお腹、右手には神社の森まである。ここから更に街連筋まで下って駅に帰って来た。4時に近い時間。秋桜子は「もう一度南アルプスに對することにした」 「日輪はかなり低くなって、山々は深い藍青色にけづつて尾根に輝いていた雪はもう見えない。しかし空はまだ晴れ渡ったままで、</p>

	いささかの雪もないから、山の形は明らから。甲斐駒など美にきびしい感じで気持ちがいい。毎日こうう山々に対していたら俳句もおのずから厳しく澄んでゆくに違いないと思った。…せめて1時間で来られたら。
	甲斐駒の雲間の雪や山さくら
	●1895(明治28)年8月、木暮理太郎が甲斐駒登頂
平賀 文男(1895—1964)	登山初期の山梨を代表する登山家。甲斐山岳会結成の中心メンバー。 「八ヶ岳火山群」「赤石渓谷」「南アルプスと其の渓谷」「日本南アルプスと甲斐の山脈」など。 今西錦司、桑原武夫ら京都三高勢と北岳の積雪期初登頂を争ったエピソードは有名。1925(大正14)年3月26日、韮崎発。 芦安一夜叉神一筋差一広河原一草すべりルートで28日、山頂に立った。下山は北沢峠に向かったが、途中でスキーの跡を発見、北沢の小屋に着くと今西たちがいて、6日前(3月22日)に登頂した事を知る。 「海内無双の雪の白峰山頂を踏んまえた時の感触」は、さすがにすこぶる意気軒昂たるものがあった。幾多の登山家が渴仰し、かつ畏敬した冬の白峰山頂は、ついに征服された。絶頂にあり丈の歓呼を叫んで下山の途のつく また甲斐山岳会結成直前に、大沢伊三郎、今井友之助、若尾金造らと赤石岳に映画撮影行。
田中 冬二(1894—1980)	福島県生まれの詩人。山梨にはよく足を運んだ。 1936(昭和11)年夏には奈良田を訪れ「山郷」をつくった。 夕暮れは雨となり 雨にまじり山焼の俳が降ってきた 父も母も兄も嫂も皆山仕事に出かけてもう七日 留守にはば唄(あさま)と幼いものたちだけ すぐ前の溪のつり橋を渡った山を上り五里も奥山の開墾小屋では雑木林を焼き 其処へまず蕎麦を蒔き、翌年は粟を 次の年には豆をつくるのだ(略) 奈良田に詩碑がある
	●1902(明治35)年、ウエストンが北岳初登頂
山本周五郎(1903—1967)	本籍が韮崎市、生まれは大月の初狩。1907(明治40)年に生家の近くの「かんば沢」で山津波が起き、一瞬にして祖父母、叔父叔母4人を失った。生き残った周五郎は父母とともに東京に移った。この体験が誕生の地を嫌いにさせ、本籍の韮崎に親しみを感じていたという。「山彦乙女」と短編「夜霧の半太郎」は韮崎が舞台。「明和絵巻」は、勤皇派の山形大弐(竜王出身)が主人公で、竜王は母とくの生まれ地。「夜霧の半太郎」では、書き出しの3段落目で「大月の宿を出た街道は半里ほどすと爪先あがりに笹子峠へ一本道、右に清冽な流れをみながら行くこと三十町で初狩村へ入る。峠にかかると宿のことで茶店が三四軒、名物の力餅や笹子飴を打っている」と、生まれ故郷を描写している。 「山彦乙女」は、甘利山と鳳凰山が舞台。かんば沢が登揚し、クライマックスはかんば沢の大崩壊。幼い時の山津波をほうふつとさせる。武田家再興を図る一族の娘2人と旗本の物語 「夜霧の半太郎」に韮崎の描写が「日が暮れかかっていた。釜梨川の方から夕靄が立ち始めて、駒ヶ岳の峰だけがくっきりと斜陽を受けている」。韮崎の町から見ると鳳凰山から甲斐駒までが屏風のように、最後の陽が残るのは一番高い甲斐駒。ささいなことだが、この確かな描写に周五郎の緻密さが現れていて、これはどの小説も同じ。

「南アルプスと奥秩父」 (1931・昭和6)年刊	山梨県山林会が編集して改造社から発刊したユニークな山岳書。山林会は山梨県の外郭団体で、行政編集の山岳百科といえそう。目次を見ると「山を観る心」の態度、「甲斐の山岳とその風景」「アルプスの意義と日本アルプスの命名者」「日本アルプスと欧州アルプスの相違点」「南北アルプスの相違点」「日本山岳登行概史」「赤石山地及び赤石山脈」「白峰山脈」「駒ヶ岳及び鳳凰山脈」「ハケ岳火山臺」「関東山地(秩父山地)」「高山植物」「登山道と標識」「山小屋」「参考事項」など。参考事項の中には「山の犠牲者」として遭難事例、山の文献なども掲載。かなりレベルの高い入門書、案内書となっている。
⑩戦後の登山と「日本百名山」が切り開いたもの	
昭和31年の日本隊マナスル初登頂で第1次登山ブーム。多くの若者が山に向かった。3人寄れば山岳会一と言われた時代。	
昭和39年発売の「日本百名山」は、登山者に新しい登り方を提示した。昭和40年代に爆発的ブームとなり、各地に〇〇百名山が登場。それは中高年登山者の目標として定着した。	
深田 久弥(1903-1971)	「日本百名山」で日本の登山を変えた。1964(昭和39)年7月20日、新潮社から発刊した。選考基準は3つ。品格、歴史、個性。南アルプスは10座選ばれた。
甲斐駒ヶ岳	日本アルプスで最も代表的なピラミッド。一番きれいな山頂。毅然という形容に値する威と品。十名山に入れる。駒の筆頭
仙丈ヶ岳	深田好み。山。軽薄や遅鈍がなく、すっきりとした品がある。おおらかで重厚、アクセントに3つのカーブ。
鳳凰山	我が国最初のアルピニズムの場所。深田は小林秀雄、今日出海と登山。今は初登山。「初っぱなからひでえ所へ連れてきやがった」と嘆いた。尻をたく深田が鬼に見えたという。 山名論争
北岳	謙虚で高い気品を備えた山。つましく、しかし凜とした気概。高らかな美しさ。富士山の大通俗に対し哲学的。
間ノ岳	標高は4位だが大きさは日本一。農鳥岳の名を残してやりたかった。農鳥は南岳、あるいは別当代
塩見岳	三伏峠から塩見の眺めは天下一品。富士山の眺めはどこより優れている。塩見とはいいい名前。そして南アルプスの他の三千mに伍しながら、どこかつつましやかなところもい。
悪沢岳	頂上から北に延びた尾根の屈託のなさ。頂上東の大岩石の散乱。千枚岳へ下る高原。いずれも目を見張る個性の強い山。南アルプス屈指の山。
赤石岳	南アルプスの宗家としての風格。おおらかな風貌、きりっとした緊まりがある寛容と威厳を兼ね備えた山頂。
聖岳	世俗を脱した高潔な山。崇高で清浄な山。
山梨は南アの5座以外にハケ岳、金峰山、瑞牆山、甲武信ヶ岳、雲取山、大菩薩嶺、富士山の計12座	
細井 吉造(1904-1936)	甲府生まれ。同盟通信⇒共同通信記者 1935(昭和10)年、「南アルプス ハケ岳連峯」(三省堂)渡辺公平、山下一夫と共著 1936年11月4日、中央アルプス南駒ヶ岳で遭難死。麓の千人塚近くの与田切川に遭難碑 1937年4月2日、遺稿集「伊那谷 木曾谷」を刊行委員会が発行 忠犬ハチ公を最初に書いたとされる(膨らませ過ぎて実態と違うという批判も) ペンネーム 甲斐駒之助 遺稿集に「塩見岳の印象」「白峰北岳・思ひ出の一片」「南アルプス稜線漫歩」「南アルプスガイド気質」など収録 222pからの「白の葬送曲」に南ア遠望のいい記述あり
桑原 武夫(1904-1988)	北岳の積雪期初登頂(1925=大正14年)者。今西錦司と同期。フランス文学者。京大後に京大文学部山岳会長のチヨゴリサ登山隊長

	<p>「回想の山山」(1944=昭和19年刊)。この中に「積雪期の白根三山」(初出は昭和7年)取集。 このなかに「山岳紀行文について」がある。書いた昭和9年時点で、「面白い紀行文はめったにない」と書いている。面白い紀行文とはどんなものか。「山頂が人間のものとなっていく」時代の紀行文こそが、面白い紀行文だという。つまり初登攀の紀行文でないと面白くないという。 しからは、初登攀が終わった後の紀行文はいかに書かれるべきか。登山家の個性、個性的な登山によるものが面白いの記述 実態はどうか。思い当たる節がある。山岳紀行文を大きく変えたのは1960年代、串田孫一の登場である。どう歩いた、どこを登った、風景はどうだった—で書かれてきた紀行文に、思案、あるいは哲学の要素に転換させた。詳細は串田の項</p>
●1904(明治37)年、ウエストンが地蔵仏初登攀	
杉原邦太郎(1905—1961)	<p>甲府市生まれ。詩人。山梨の近代詩をリードした。日本山岳会員だった父の影響で若いころから登山を続けた 詩集に「火山」「鐵」「山と高原の詩」 「回想の駒」 日野春高地の柿は 王者への献物だろう 熟れぎった木通(あげび)とともよし 馬頭観音を巧みな配置として そこに見る 甲斐駒の太古研磨の全容は 麗々と云ふまでもない ああ尊厳の極値 美学の寵栄(略)</p>
加藤文太郎(1905～1936)	<p>単独行の実践。南アルプスは2回。 1926(大正15)年8月 戸台—仙丈—甲斐駒—台ヶ原—八ヶ岳—浅間山(5日間) 1927(昭和2)年7月 小渋川—河原—赤石—聖—荒川—塩見—農鳥—間ノ岳—北岳—高嶺—賽の河原—青木湯— 祖母石—葎崎駅(8日間) 「私の乗った汽車は午後九時頃葎崎駅を離れて行く。私は今振り返ってみるにかかる長いコースを、ただ一人十日余の食糧を持ち、しかも随分迷い回ってなお八日ぐらいで縦走し得たという事は、神のお守りがまことに感慨無量で淋しさをさえ感じた」 1936(昭和11)年1月3日、槍ヶ岳から北鎌尾根に向かい、行方不明</p>
池田光一郎(1905～●)	<p>「地蔵が岳」1969(昭和44)年、柳正堂書店刊 奇人と呼ばれた人。登山と山岳写真。朝な夕なに自宅から眺める親しい山という。地蔵が岳研究と山域の地誌、登山史、民謡から大武川渓谷でのヌード撮影まで、多彩な内容になっている 今様子授地蔵、地蔵が岳か鳳凰山か、地蔵ピークに登った人々、神鏡秘話、高山植物と動物たち、熊に出遭った話、登山コース開拓はい回る沢、思い出の地蔵が岳撮影行、雪の地蔵で遭難、山の奇現象、地蔵が岳の伝説、小武川俚譚、鷹ノ田と甘利山、声安と御勅使川、民謡のふる里、山と歌と…</p>
●1905(明治38)年、日本山岳会発足	

●1907(明治40)年、石塚末吉らが大門沢から白根三山初縦走	
●1910(明治43)年、甲府中学生在が地藏仏に日本人初登頂	
新田 次郎(1912-1980)	上諏訪町生まれ。山岳小説家。「白い花が好きだ」231ページ以降に文学問答 氣象庁。1932～1937年まで富士山測候所勤務。1951年、「強力伝」でサンデー毎日30周年 懸賞小説1等入選、第34回直木賞。妻藤原ていの「流れる星は生きている」に刺激された 「富士山」「富士山頂」など。「武田信玄」「武田勝頼」など。「信玄」で吉川英治文学賞 山梨が好きで、「第2の故郷」と言い、山梨出身の文化人らで作る「山人会」会員になった 先祖は諏訪氏に仕え、信玄傘下に入ると先方衆として戦に参加し、川中島にも… 南アルプスは作品が少なく、「三つの遭難碑」などがあがる。遺族3家族と山岳会4者それぞれの 思惑を通して遭難の後遺症を書いている
(1)アルプの時代	昭和33年、串田孫一、尾崎喜八、山口あき久らが編集。記録、紀行中心の山岳文学に「心象」を加えた 登山の精神活動に重きを置いた文章表現が、新しい山岳文学を切り開いた
串田 孫一(1915-2005)	「若き日の山」「山のパンセ」「心の歌う山」三部作ほか多数 日本百名山を串田が書いたらどうだったろうか 「山と分かれる峠 峠(笹子)の隧道で、それまで我慢して見ないようにしていた背後の景色を、振り返って見た。昔物好きに甲州の 山歩き的第一步を笹子の峠越えとして夜道を歩いたが、夜明けの、恐らく同じこの位置で、目の前にずらりと並んだ未知の山々を 突然見て、声が出ないほどに感動した。だが今はその悉くを言えないまでも、見えている山の多くの山頂を訪れ、それぞれに思い出を 残した。それは自分自身への生命を証明するものであり、自然に微笑みが浮かぶほどに、これも亦満ち足りた気分であった 然し、同時に別れの時でもあった。根拠のない自分の未来を予感してあれこれ考えるのは差し控えたいが、こんなに静かで美しい 条件の中での甲州の山々との別れは、願ってもそう簡単に得られるものではない。また逢う日もあろうが、甲州の山々よ、さようなら」 風の伯爵夫人(レンズ雲)別れの曲、焚火、夕映え「若き日の山」 山との対話「心の歌う山」は、串田と山との会話形式。甲斐駒は N画伯の、君を描いた絵を見た どこから見た私だった？ 日野春から。あの宿屋の二階の窓から⇒志満屋 甲斐駒は、あの摩利支天を持っていることで優越を感じることもあるが、時にはひがみも感じるらしい 心配いらぬ。N画伯は優れた風景画家だもの。おかしな姿をわざわざ描くようなことなんかしない それならよかったですという顔をする(略)
	書くことで自分を誇るのではなく、自省する、したことを考える、など、それまでの山の文章とは全く違った世界観を出している 強くも、弱くも、へたでも上手でもない、考えること、知ることが大事。そんな山での思いを書いている
▽「甘利山」と「山と人」	登山、あるいは山の存在が、人間の精神生活をどれほど充実させるものか、または人間に知恵や知識を与えて くれるのか。教えてくれる本。串田や尾崎に通じる精神世界がある

山寺仁太郎(1919ー)	「甘利山」		
	甘利山の文学百科、甘利山の百科を文学的に表現。民俗学の世界も		
	観音岳の白い農牛のこと		
	柳田国男のこと		
飯田 龍太(1920ー2007)	蛇笏の四男。父親から「雲母」を引き継ぎ、1992(平成4)年、900号で終刊、俳壇に衝撃を与えた。2005年に飯田龍太全集10巻 自選五句 一月の川一月の谷の中 白梅のあと紅梅の深空あり どの子にも涼しく風の吹く日かな 紺紺春月重く出でしかな		
	南アルプス 水澄みて四方の関ある甲斐の国⇒蛇笏の 芋の露連山影を正しうす と通じる 「あつという間に盆地に火が広がっていった。とくに太田町周辺が猛火に包まれていた。八ヶ岳や甲斐駒ヶ岳の山容が浮かび上がった」 (「龍太語る」一甲府空襲)		
窪田 精(1921ー2004)	高根町(北杜市)生まれ。1957(昭和32)年、「狂った時間」が第32回芥川賞候補作品に 昭和53年、「海霧のある原野」で第10回多喜二・百合子賞、平成4年に「夜明けの時」などで第24回同賞 「霧の南アルプス」は、白根三山縦走が皇太子の北岳登山とブックングした体験をもとに、戦死して家が絶えてしまった同級生への追憶 山梨を舞台にした「石楠花村日記」がある		
	●1922(大正11)年7月、朝香宮が南ア北部縦走		
	●1924(大正13)6月、甲斐山岳会発足		
	●1925(大正14)年3月、京都三高勢が積雪期の初登頂北岳		
山村 正光(1927ー2005)	「車窓の山旅 中央線から見える山」「甲斐の山旅・甲州百山(共著)」。2005年12月26日没 国鉄車掌で勤め上げ、新宿ー松本間往復約4千回の記録を持つ		
	●1927(昭和2)年、京大の高橋健治らが北岳バットレス初登攀。加藤文太郎が南ア単独行		
	●1928(昭和3)年、大倉喜八郎の赤石岳大名登山		
高室陽二郎(1929ー	「山と人」。「甘利山と並んで最近の山岳文学?の双壁 北海道の人々との交換、持病とモンブランへの闘いは人間の意志の強さ、白根三山漫歩はユーモアと哀愁漂う山岳紀行		

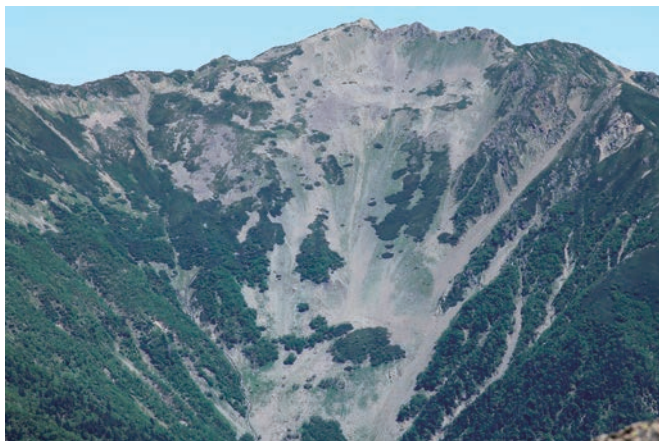
	深い知識と交友の深さに支えられた文章
●1929(昭和4)年	この年の 泉堂小屋宿泊者数 五葉尾根32、広河原272人、北御室314(うち女3)、早川尾根141、北沢396、両俣174、白根御池285、北岳72、間ノ岳216、大門沢259⇒2161 他に赤岳356、国師92(女2)、破風93(3)
12 登山は墮落したのか	本多勝一「山を考える」(昭和46年) 遭難を取材し続けた新聞記者(京大山岳部出身)が、登山のレジャー化を批判。 初登頂主義からの脱却を提言
本多 勝一(1932-	「愉しかりし山」「初めての山」「山を考える」ほか 初登頂の時代が終わったことで、本当の登山は終わった 今流の登山は「山は死んだ」 衝撃的なレジャー登山否定の書
桂木 優(1950-	「41人の嵐」。1982(昭和57)年台風10号の記録。桂木はペンネーム。本名星美知子。福島県出身 1971年ころから登山を始め、79年から南アルプス広河原ロッジで働き始め、80年に両俣小屋の小屋番に 83年から同小屋の管理人。82年8月、中部山岳は台風10号の直撃を受けた。北沢峠の通算雨量768ミリ、広河原は800ミリを 観測した後、観測不能になった。この時、両俣に閉じ込められた登山者41人の決死の脱出の記録
参考	「山梨の登山百年 山の巡礼者たち」「山梨百名山」

●は主な登山史上の出来事。人物の生まれ年や出来事で挿入

山梨県立大学 観光講座 2013

「南アルプスの自然と文化」

発行者 公立大学 山梨県立大学 地域研究交流センター
発行日 平成26年3月30日
執筆者 塩沢久仙 新津 健 輿水達司 斎藤秀樹
大久保栄治 中村 仁 北原正彦 村山 力
関間俊明 深沢健三 (順不同)
連絡先 山梨県立大学 地域研究交流センター
〒400-0035 山梨県甲府市飯田五丁目11-1
Tel 055-224-5260
印刷所 株式会社 三 縁 Tel 055-267-6415



University Center for Research and Exchange



山梨県立大学地域研究交流センター

〒400-0035 山梨県甲府市飯田 5-11-1 TEL.055-224-5260 FAX.055-224-5386

